

---

# 僕の日常は小さなカフェにて

ヨハン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の日常は小さなカフェにて

### 【Nコード】

N8744Z

### 【作者名】

ヨハン

### 【あらすじ】

誰が見ても美少女な少年、幸村<sup>ゆきむら</sup> 凧<sup>なぎ</sup>。  
彼は根っからの虐められっ子体質であり、その容姿から女子と勘違いした男子に告白される事も多かった。  
しかし、彼が男だと知ると多くの人間は彼を虐めの対象にする。

そんな虐められっ子の少年、凧はある日いつものように虐められていた。

それを助けた青年との出会いが、彼の日常を変えていく。

自身のブログやpixivなどに重複して転載して  
ます。どちらもユーザー名はヨハンです。

## 僕の容姿は災難の元（前書き）

小説の初心者ですが頑張つて書きます。  
楽しんでいただけたら幸いです。

## 僕の容姿は災難の元

「てめえ、よくも!」

「っ……離してよっ!」

地平線の彼方にもうすぐ日が沈みそうな海。細波が打ち付ける暗闇の砂浜。

僕はリーダーらしき恰幅の良い男と、その取り巻きと思われる数人の男達に囲まれ、リーダーらしき男に腕を?まれていた。

「よくも俺様を騙しやがって!」

「勝手に勘違いして告白してきたのはそっちじゃん! 僕は男だ!」

女だと勘違いして僕に告白してきたその男に、僕は勝手に恨まれていた。

あまり珍しい体験ではないのだけれど、やはりこの容姿に生まれた事を後悔する瞬間だった。

「うるせえ! 間違っただよ! 男に興味はねえ! なよなよしやがって! ぶん殴ってやる!」

「はあ?! なんでそうなるのさ!」

男は理不尽極まりない理屈を大声で言い放つ。

僕は反論するが、もう遅かった。男の拳がすぐ目の前に来ていた。

「黙れ!」

「うぐっ！ がっ！」

男の拳が僕の頬を打ち抜く。その度に快音が響いていた。周りの取り巻きと思われる男達もそれに便乗し、殴る蹴るの暴行を繰り返し始める。

激しい痛みが僕を襲う。砂の上に小さくうずくまったので、暴行を受ける度に砂で全身が汚れていく。

「この野郎！ ふざけんなっ！」

「あぐっ！」

乱暴な怒声と僕の悲鳴に誰かが気づいたのだろうか。砂浜を走る足音が聞こえてきた。

僕は薄く目を開け、その足音の方向を見る。

「何してるんだ！ やめろ！！」

「やっべ！ 誰か来たぜ！ 逃げろ！」

少し低くてよく通る声……次の瞬間にはもう、男達はとっさに逃げ出していた。

僕はそのまま砂の上に横たわる。どうせ汚れているからこの際どうでも良い。

……なんて理由は言い訳だ。本当は単純に痛みで立ち上がれないだけだった。

「おい！ しっかりしろ！」

「う……う……」

「おい！ おい！」

声の張本人が僕の上半身を起こす。心配そうな顔がつつすらと目に映った。

その人の呼び掛けに反応しようとするも、僕の意識はゆっくりと闇の中へ落ちていった。

「……ん……」

瞼が重い。そして体がまだ所々痛む。目を覚ましてすぐにそんな感覚に見舞われた。

僕は次に鼻で深い呼吸を試みる。コーヒーの良い匂いがした。

……「コーヒー？」

「おい、大丈夫ー？」

「わっ……っ！」

「わわっ、駄目だよ。まだ安静にしてなきゃ」

近くにあった顔に思わず吃驚して、僕は体を跳ね上がらせた。すぐに体を痛みが襲う。

目の前にいた、美人で優しそうな女性が慌てていた。手にはマグカップを持っている。

その人から目を逸らし、僕は身の回りを見回してみた。僕が寝ていたのはソファだった。他にはテレビやベッド、その他のインテリア。生活の必需品が、丸太作りの山小屋のような部屋の中に置かれていた。

僕は自分の状況がよく理解できなかった。

「こ……ここは何処ですか……？」

僕は恐る恐る、目の前の女性に尋ねてみる。

女性は少しきよんとした表情を浮かべ、その後すぐに笑って答えた。

「あ、私の部屋だよ。私の知り合いがさ、ボロボロの君をここに連れてきたんだよ。最初は驚いたけどさ、放っておけないからここに寝かせてたんだ」

「そう……ですか。ありがとうございます……」

「ははっ、礼なんかいいって」

目の前の女性は気さくな態度だった。笑うとやっぱり美人だ。

その笑顔に僕が少し顔を綻ばせた時、木の階段を駆け上がる音が聞こえた。

「……明日香さん、その子の様子は……って目を覚ましてら……大丈夫か？」

階段から現れたその人は、僕を砂浜で助けてくれた人だった。何かの制服のような格好で、黒いエプロンを着用していた。



「……………」

「ねえねえ。大丈夫？だつてさ」

「え、あ……………はい。大丈夫です……………痛っ」

男の人の服装をぼーっと見てみると、女性に声を掛けられた。僕は  
は我に返り慌てて答えた。その時にまた全身が痛んだ。

「まだ痛むのか……………？」

男の人は僕に近づいてきて言った。声が少し低く、なんだか怖そ  
うな雰囲気でした。が、どうやら良い人なのかもしれない。顔立ち  
からすればまだ20代前半くらいだった。そしてコーヒーの香りが  
その男の人からした。

「あのっ……………助けてくれてありがとうございます」

僕は頭を下げる。あんな状況は慣れっこだが、助けて貰ったのは  
久しぶりだった。

「……………別に礼はいらん。男が数人で女を虐めるなんてこと……………どん  
な理由があるつとあつちやいけねえだろーが……………」

「そうですねか……………って、あの。僕……………男なんですけど」

ぶつきらぼつにそつぽを向く男の人の言葉に相槌を打ちかけて、  
僕は訂正する。

また間違えられた、そう思いつつも本当のことを告白する。

すると、しばらく沈黙。女性と男の人が固まっていたような気が

した。

「……………男……………なのか？」

「嘘……………だよな？ だってすっごく可愛いし……………どこからどう見ても女の子じゃ……………？」

「はは……………でも、本当に男です……………から」

その後しばらく、その場の空気が凍り付いていた気がした。

「まあ、君可愛いしどっちでもいいや。ぎゅーっ」

「わわわっ！ 離して下さい！」

どうしてこうなったんだろう。

状況を整理すると、僕が自分は男だと告白した後、男の人は一旦階段を降りて行った。

目の前の女性は男の人が下の階に消えていくのを確認した後に、僕を犬か猫のような扱いで抱きしめている。

僕は抱きしめられている。抜け出そうとするも中々抜けられない。体が痛い。

「っ！……………ふう」

「何で逃げちゃったのー？ 遠慮せずにさ、こっちにおいで？」

何とか抱擁から抜け出す。しかし、女性は両手を広げる。

「……嫌です」

僕の答えに納得がいかないのか、女性がえーっと言う。しかし僕は、少し距離を空けた。

「そこを何とか……私に君の温もりを！」

「嫌ですよ……そんなこと」

なんだかこういうスキンシップは……苦手だ。今は体が痛いし。多分良い人なんだろうけど……ちょっと変わってる人だ。

「お願い」

「嫌です」

「抱きしめさせて？」

「嫌です」

「いいじゃん」

「駄目です」

男の人が戻ってくるまで、僕達はしばらくこのやり取りを繰り返した。

「ほら……これ飲め」

「ありがとうございます……あの、大丈夫ですか？」

「うう……痛いよー、亮の馬鹿ー」

「明日香さんが見ず知らずの子にセクハラ行為をしてるからでしょーが……」

「セクハラじゃないよ、スキンシップだよ」

「相手が嫌がってたからセクハラだっつーの」

「っ！ またチョップしたー！」

あの後、男の人がやってきて背後から女性にチョップをした。そして僕にカフェオレが入ったマグカップを渡してくれた。

女性曰くスキンシップらしいが、男に人にはセクハラだと咎められ、それが原因で二人は喧嘩している。でもなんだか、二人とも楽しそうだった。

「そっいや、君って名前なんていうの？」

急に女性がこちらを向く。

僕はとっさの質問に戸惑いながらも答える。

「あつ、えつと。幸村ゆきむら風です」

「風……やっぱり女の子でしょ？」

「違いますけど……」

「残念……」

「残念って何ですか……はは」

思わず苦笑してしまう。

どうやら、僕が女である可能性をまだ諦めていないらしい。

そう感じていると、本来の話題を思い出したように女性が自己紹介をした。

「あ、私は羽入はにゅう明日香あすかっていうんだ。よろしくね」

「俺は神崎かみさき亮りょうだ」

「羽入さんに……神崎さん……よろしくお願いします」

「下の名前でいいよ、風君」

「……俺も下の名前でいい」

「……明日香さんに……亮さん。ふふっ」

何故か顔が綻んだ。僕は目の前の二人に何ともいえない安心感を感じていた。

「やっぱり可愛いわ……よしよし」

「わっ……」

明日香さんの暖かい手が僕の頭を撫でる。

くすぐったいような感覚が頭から伝わってくる。

なんだか恥ずかしかったけど不思議と嫌な気分がしない。

「ところで、凧の家はどこなんだ？ 今頃親が心配してるんじゃない？」

……

亮さんが尋ねてきた。

僕の親は海外出張中ではない。今は仕送りをして貰って一人で生活していた。

その旨を亮さんに伝える。

すると、隣で話を聞いていた明日香さんが提案してきた。

「じゃあさ。今日はここに泊まっていきなよ。その怪我じゃ家に帰るのも大変でしょ？」

「え……でも……」

「遠慮しないで。どうせ一人暮らしで寂しいしっ」

「そんな……そこまでお世話になるわけには……」

「大丈夫だよ。変な事しないし」

「オイ」

亮さんが怪訝そうにツツコミをいれた。  
僕はしばらく黙り込んだ。そして……

「……やっぱり、失礼します！」

そう言っつて僕は駆け出した。凄く身体が痛んだが気にせず階段を駆け下りる。階段の一番下に僕の靴があったので、靴を急いで履いて出入り口らしき場所から出て行く。今まで僕がいた場所はカフェらしき店の2階だったことに気がつく。オシヤレで落ち着いた内装だった。

店の外に出ると、そこが意外にも家の近くであることがわかった。そして、そのカフェがいつもは目に留めず、あまり意識していない店であったことを自覚する。

僕は自宅を目指し、海が見える小さなカフェから少しずつ離れていった。

ふと振り向くと、カフェの入り口付近にはさっきの2人がいた。どうやらこちらを見ているようだった。

僕は急に罪悪感に駆られた。それを振り払うように走り出し、やがてカフェは見えなくなつた。

僕は痛みと格闘しながら、自宅を目指して夜を迎えた町を走つていった。

僕の不安は心の足枷（前書き）

凄く長くなりました……

というわけで2話目になります。

途中5行空いている所は場面の切り替わり……と一応説明させていただきます。



## 僕の不安は心の足枷

あれから数日後。

怪我は思ったより大したことはなく、怪我をした日から今日までの数日間ですべて治っていた。

あの日以来、僕は一度もあのカフェを訪れようとはしていない。そもそもあの二人は赤の他人だ。あの時はその場の雰囲気です心安心していたし心を開いていたのかもしれない。でも、実際はどこの誰かも知らない人達だ。もう自分には関係ない。

そんな考えを持ち始めていた。

明日も明後日も、普通に高校に通って普通に日常を送る。虐められることも隣り合わせの生活を送る、きつと。

二度とあの人達と関わる事もない。

結局……一人でいるのが一番性に合っている。

「……………」

今日はよく晴れた日だった。太陽の光が燦々と海に降り注ぎ、水面がきらきらと光を反射させていた。

僕は砂浜に腰を下ろし、一人で海を眺めていた。静かな波の音が響いき、僕の耳に届く。

ぼかぼかとした暖かい陽気の中で、僕は瞼が重くなる。日差しが気持ちよい。

次の瞬間、聞きたくない怒声によって僕の中の睡魔が消えた。

「幸村アアアア！」

「わっ！」

振り向くとこの間の恰幅のいい男がいた。嫌な予感がする。

「この間は邪魔が入ったが今日はそうはいかねえ！　って待ちやがれ！」

「っ！　嫌だ！」

男が台詞を言い切る前に僕は走って逃げ出していた。呼吸をする事も忘れそうになるほど、必死で走っていた。しかし、足場は砂浜なので走りにくい。それに、僕の元々の足の遅さも加わる。男との距離が縮む一方だった。

「ハアっ……ハアっ……」

息が切れる。体力の限界だった。

僕はその場に膝を着いてしまった。汗が頬を伝う。

振り向き尻餅をつく、後ろから刻一刻と男が近づいてくる。

思えば……どうして僕は逃げていたんだろう。この間だって自分の足の遅さも力の弱さも、嫌というほど自覚しているのに。どうせ、今までもこれからも虐められっ子なのに。どうして。

「……何してんだ？」

「あ……亮さん……」

あの日、僕を助けてくれた恩人である神崎亮かみさきりょうさんがいた。僕と男の間を遮る様に割って入る。

「な、なんだてめえ！」

「俺か？ 俺はこの子の知り合いだ……それがどうした」

この前はあまり気にしなかったが亮さんはかなりの長身だ。亮さんの後姿が凄く頼もしく目に映る。

男はそんな亮さんに少し怖気づくが、ポーカーフェイスを装って強がるような態度を見せる。

「邪魔すんじゃない！ 俺はそいつに恨みがあんだよ！」

「……で、それが虐める理由になんのか」

「あ、ああそうだ！ だから……そこをどけ！ お前には関係ねえだろ！」

亮さんは凄い血相で怒鳴る相手にまったく動じない。

「関係ある。知り合いが危険な目に遭ってるのに放っておくわけねえ」

「……！！」

たった一度顔を合わせただけ。そんな関係なのにどうしてそこまでしてくれるのか、今の僕にはわからなかった。

「ま、どうしてもってんなら……俺が代わりに殴られてやる」

「は、はあ？！ 何言ってるんだ！ 頭おかしいんじゃないのか？！」

亮さんの発言に、ますます疑問が膨張する。

僕自身の問題であり、亮さんが殴られる義理はない。（だからと

「いつて僕が殴られるのも理不尽極まりないが」

「そう思うならそれでもいいが……とりあえずこの子には指一本触れんな。もし触れたら……色々と保障出来ねえぞ」

亮さんの声のトーンが明らかに下がった。

後ろからで分からなかったが、男の動揺が顔に出る。どうやら物凄い殺気を秘めた目で睨んでいるらしい。

「ひっ……殺される！」

男が一目散に逃げ出す。「殺される」って、どれだけ凄い睨み方をしたのかわからない。

亮さんは尻餅をついたままの僕に手を差し伸べる。

「……立てるか」

その言葉を聞いた瞬間、僕の中の何かが切れた。そして、かなりの量の涙が頬を伝う。鼻をすすり袖で顔を拭うがあまり意味が無い。亮さんが心配そうに声をかけてくれた。

「ど、どうした……どこか痛むのか……」

「いえ……っ……なんでもないっ……です」

その後僕が泣き止むまで、亮さんは傍にいてくれた。

泣き止んだ後、僕は追われる前のように海を眺めていた。隣には亮さんが腰を下ろしている。

「……落ち着いたか」

「はい……その、すみませんでした」

「なんで謝るんだ」

助けてもらったのに、何故か泣き出してしまつて迷惑をかけてしまったと思つた。

しかし、亮さんはあまり気にしていないようだった。

「……あの」

「？」

「どうして……僕を助けてくれたんでしょ……？ あんなに……必死に守ってくれるんでしょ……？」

恐る恐る聞いてみる。

どうして自分のためにここまでしてくれるのか全く分からなかった。しばらくして亮さんは立ち上がり、僕の横を通り過ぎて行った。

「……………さあな」

小さくそう言って、亮さんは僕から離れていった。少し離れた頃、亮さんは急に振り返つた。

「明日香さんが、凧に会いたがってた………気が向いたらでいい」

気が向いたら顔を出してくれということなのだろうか。

それだけを言い残して、亮さんは去っていった。

細波の音が砂浜に響く中、僕はただその場に立ち尽くしていた。

僕は少し緊張しながらカフェの出入り口であるドアを開ける。この前は逃げるようにして帰ってきてしまったから少し気まづかった。ドアの上部に取り付けられていた鈴がなる。すると、その音に誘われるように店の奥から明日香さんが顔を出した。店の制服姿。その上から黒いエプロンを着用している。

彼女のすぐ後ろには亮さんがいた。何も言わず、軽く手を挙げて挨拶してくれた。

「あのっ………うわっ！」

「凧君だああ！ 久しぶりいいい！」

亮さんの挨拶に反応した僕は明日香さんを見た。そして、目が合ったと思ったら一瞬で距離を詰められ、強く抱擁される。

突然の事に一瞬思考が停止した。体が硬直する。しかし、すぐに恥ずかしさに見舞われた。僕は必死に抜け出そうと抵抗した。

「離して下さい！ 明日香さん！！！」

「嫌よ！ 今日離さないからね！！」

ぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ。そんな擬音語がこれほど似合う状況はきつと少ない。

「ちよっ……苦し……いです」

僕が苦しさのあまり気を失いそうになった時だった。店の奥から鈴の音のような声が聞こえてくる。

「あら、明日香さん。その子が前に言ってた可愛い男の子ですか？」

声の主と思われる、気品が溢れる女性が店の奥から出てきた。

綺麗な黒髪でカチューシャをしていた。服装は明日香さんと同じく店の制服、そして黒いエプロン。身長はおそらく僕よりも高い。彼女は明日香さんに抱擁されている僕の頭に手を置いて言った。

「ふふ、明日香さんは大胆ですけどね、本当はとてもいい人なんですよ。だから仲良くしてあげてくださいね」

丁寧な口調に、心が洗われるような天真爛漫の笑顔。その笑顔に向けられた瞬間、僕は息を呑んだ。

「は、はっ……」

思わず答えてしまう。その答えを聞くと、女性は嬉しそうに明日香さんに言っ。

「だそうですよ。明日香さんっ」

あんな笑顔を向けられて断れる人はそうそういないだろう。  
女性は僕に見せた笑顔を明日香さんにも向ける。

「ホントに？」

それを聞いた明日香さんが僕に向けた物凄く輝いている眼差し。  
相当嬉しいらしい。

「……………」

僕はまたも硬直してしまふ。頬が赤く染まっているのが自分でも  
分かった。

明日香さんの顔が見る見る内に綻んでいく。

「か…………可愛すぎ……………」

「凄く…………苦しいです」

さつきよりも強い抱擁。この抱擁から抜け出すという発想が、き  
つと意味を成さないくらいに。

「明日香さん、そこら辺でそろそろ離してやった方が……………」

亮さんが助け舟を出してくれた。

明日香さんは亮さんの言葉に対し即答した。

「やだ」

助け舟はすぐに沈没した。



きつとしばらくこのままだろう、僕は直感した。  
その直感は見事に的中し、しばらく離してもらえなかった。

「それで、今日はどうしてここに？」

店内のカウンター席に座らされた僕に、明日香さんが尋ねる。  
亮さんと、笑顔を素敵な女性は明日香さんの両隣にいる。

「え……と、助けてもらったお礼を言いに来たのと……明日香さんが会いたがってたって、亮さんが言ってたからです」

僕は正直に答えた。当初は本来の目的であったこの答えを危うく忘れそうになっていたが。

その答えを聞くと、亮さんは静かに微笑んだ。笑顔の素敵な女性もクスツと笑う。明日香さんは……

「あの……明日香……さん？」

「んー？」

「これは一体……」

いつの間にか僕の背後にいた。そして後ろからまた抱擁される。この状況にだんだん慣れてきてしまっている自分が少し怖い。

後者の理由……言わなくてもよかったかな。

「相当気に入られたな、凧」

亮さんが言った。何だか亮さんが少し楽しんでそうな気がしたの

は、僕の気のせいだと信じたい。

「そういや、凧は何かアルバイトしてたりするの？」

亮さんのいきなりの質問。

「え？ 特に何も……」

「そうか……」

「？」

僕は何が何だかよくわからなかった。亮さんがどうしてこんな質問をしたのか。

亮さんは一呼吸おいた後、僕に提案する。その提案を聞き、なんとなく質問の意図が分かった。

「……よかつたらここで働いてみないか？」

「えっ……？」

唐突な提案に僕は驚いた。

亮さんは僕の様子を見て付け加えた。

「もしよければただどな。このカフェ、俺らを含め四人しか従業員  
がないんだ。それに……」

「それに……？」

亮さんの途切れた言葉を僕が繰り返す。

「何だか、凧ともっと関わってみたくなくなっただんな」

「……………」

その言葉にまたも驚く。だが、驚くと同時に嬉しさもあった。

亮さんは、驚きと嬉しさの入り混じった僕の顔を見て口元を緩ませた。

心が揺らぐ僕への追撃と言わんばかりに、後ろから抱き着いている明日香さんが言った。

「ナイスアイデアだね！ 凧君がいればきっと楽しくなるよ！ 私からもお願い！」

「明日香さん……………」

僕は少し後ろを向いて呟いた。

ここまで人をお願いされることは今まで無かった。必要としてもらえることも無かった。

僕の心は確実に、このカフェで働くということに向き始めていた。しかし、本当に自分でいいのだろうか。僕は心の中で葛藤し始める。

僕は震える声で呟いた。

「本当に……………僕なんかでいいんでしょうか……………」

呟いた後、場が沈黙する。

僕の思い込みだろうか、明日香さんの僕を抱きしめる腕の力が強まった気がした。

「今までだって僕と関わろうとしてくれた人はいました……でもっ……皆離れていきました。虐められっ子の僕と関わると……皆ろくな目に合わないって……」

僕は震えた声で続ける。

「怖い……んです……誰かと関わって、見捨てられるのが……離れていってしまうのが……」

「凧君……」

明日香さんの腕の力が更に強まる。

「だから……その……」

「そんなモン、こごじゃ関係ねえよ」

「え……？」

亮さんが僕の言葉を遮るように言った。  
それに続けて明日香さんも言った。

「私達が関わりたくて関わってるんだから……心配しないで」

さっきまでの口調とは違い、穏やかで優しい口調だった。  
優しい抱擁、明日香さんの体温が背中から伝わる。

「私も……最初は凧さんと同じような考えでしたけれど……今ではこのカフェが大好きで仕方ありません」

女性に再び、あの素敵な笑顔を向けられた。  
この人もこのカフェで働くまで何かあったんだろうか。  
三人の言葉が頭の中で何度も繰り返す響く。

「……よろしく……お願いします……」

言葉を考えるよりも先に言い出していた。それが僕の本音であり、  
願いだっただのかもしれない。

静かに言葉を言い終えると、明日香さんが真っ先に嬉しそうな反  
応してくれた。

「よろしくね！ 凧君！」

「……はい！」

向けられた無垢な笑顔に、僕は力強く答えた。

「とりあえず、改めて自己紹介しようか」

明日香さんの提案で自己紹介をするらしい。

少しでも早く親睦を深めようとする明日香さんなりの考えなのだ  
ろうか。

「私はこのカフェ『さざなみ』の店長、羽入明日香ねっ。年齢は…  
…25。ちなみにこの店の2階が私の家なの。結構広いわりに一人  
暮らしだから寂しくてさ……だからいつでも遊びに来ていいからね

っ?」

結構長めの自己紹介だった。

この前の部屋は明日香さんの部屋だったのか、と少し関心する。そして、年齢の部分で凄く声が小さくなっていたことが気になったがきつと気にしてはいけないのだろう。

次に亮さんが喋り出した。

「神崎亮。22歳だ。漢字で苗字を書くと『かんざき』と間違われることが多いが『かみさき』な。ここでは厨房担当で料理長だ。ちなみに俺以外にもう一人厨房担当がいる。まあ……どんな奴かはすぐ分かるさ」

苗字の件は少し気にしてるみたいだ。

自己紹介の後半で、亮さんは腕時計をちらりと見ていた。すぐに分かるというのは、すぐに会えるということなのかな。

「私は立明寺彩乃たけあき さいのと申します。年齢はちょうど20歳です。凧さんと同じように、亮さんにお誘い頂いてこのカフェで働き始めました。私以外の方は皆さん忙しいと思うので、わからないことがあったら私に聞いてくださいね」

また素敵な笑顔を向けられた。相変わらず心が洗われるような天真爛漫の笑顔だ。

彩乃さんの口調はまるでお嬢様のようで、とても丁寧で優しい。

「ささ、次は凧君の番だよ」

明日香さんに催促され、僕も自己紹介をする。

「僕は幸村凧といいます。一応、17歳の高校生です。今は海外出張している両親に仕送りをしてもらいながら一人暮らししてます。迷惑を掛けることも多いと思いますけど……よろしくお願いします！」

「よろしくね！ 凧君！」

「よろしくな」

「よろしくお願いしますね」

三人の反応に僕は笑顔で答えた。  
その時、店のドアが開き鈴が鳴った。

「こんにちは……ってあれ？ 皆でどうしたの？」

現れたのは亮さんが言っていたもう一人の厨房担当の人だった。  
明日香さんが僕の肩を抱いて言った。

「可愛いでしょ？ 新たな仲間だよ」

「へえ……」

「ゆ、幸村凧っていいいます。よろしくお願いします」

僕はお辞儀をした。すると……

「明日香さんに相当気に入られて、大変な日々になるかもしれないねえ……ふふつ。俺は井上冬夜（フユキヤ）って言うんだ。そこにいる神崎亮と

同世代だよ。よろしくねー」

何故だろう。背筋が凍るような気がした。

それ以前に、この人の目を見ていると全てを見透かされているようだった。

「ふうん……何だか、君とは仲良くなれそうな気がするな。観察力が鋭そうだし、僕の前であんまり情報を漏らしていけないと思ってるみたいだからね」

爽やかな笑顔。だけど何故か……黒い。

「あー、こいつは腹黒のドSだからな、気をつけるよ」

亮さんが言った。なんていうかそんな気がします、と心の中で共感する。

「えー、そうかなー？ 俺ってそんなに腹黒い？」

「「うん」」

「何だか、少し不思議ですよね」

亮さんと明日香さんのストレートな返答が見事に八モる。  
彩乃さんは言葉を選んだようだった。

「ははっ、まあいいや。よろしくね、凧君」

「は、はい」



でも、このカフェでの、この面々との出会いはきっと……

「運命……かな……」

「何か言った？ 凧君？」

「いえ、何も……」

今はまだ小さな疑問だけど、いつか本当にそうだと思えばいいな。

## 僕の不安は心の足枷（後書き）

長かった……けど書いてると楽しいです。

推敲は何度もするようになっていますが

それでも誤字などがあるかもしれません……

その他ご指摘などがあればお願いします。感想もお待ちしております。

## 僕の初日はウェイトレス姿（前書き）

3話目になります。今になってやっと季節の描写をちよいちよい入  
れ始めました。

（というか年越しに便乗しようとする……げぶん）

## 僕の初日はウェイトレス姿

「あゝ……早く凧君来ないかな」

カウンターにもたれかかった明日香が力の無い声で呟いた。その様子を見た彩乃が明日香に諭すように言う。

「明日香さん、お客様がいるのにそんなにだらけてはいけませんよ？」

彩乃の言うとおり、店内のテーブル席には数人の客が座って楽しそうに会話をしていた。

逆にカウンター席には客がない。明日香はそれをしっかりと理解した上で行動していた。

しかし、そんな考えを微塵も知らない彩乃の注意に少しムツとする。

「おゝ、彩乃。生意気言うようになったな……」

そして明日香は怪しい目つきで綾乃に言い寄る。少しニヤニヤしていた。彼女の両手は宙を掻く。

「明日香……さん？」

「そんな子にはお仕置きしなきゃな……覚悟っ」

「きゃっ……明日香さん！ 辞めて下さい！ あっ」

「……何してんだ己は」

「いでっ」

明日香が彩乃の体に自分の体を密着させ、いざ襲おうとした時だった。

亮の容赦ない拳骨が明日香の頭に直撃する。

彩乃を抱きしめていた明日香の腕が離れ、自身の頭を抑えた。

「……明日香さん……流石に営業中はそういうこと控えた方がいいって何度も言ってるでしょうが……」

亮が呆れたような声で批判する。

「何言ってるんの亮……」

「……？」

明日香の声が急に冷静さを帯びた。

その真剣な雰囲気の影響され、亮は不思議そうにしながらも少し真剣な顔つきになった。

「美少女を襲うのに時間なんか関係無いんだよ！」

明日香ははっきりとした口調で言い切った。

そして亮の方を見る。しかし亮の姿は無かった。

「ってあれ、亮は？」

「亮さんなら呆れた顔で厨房にお戻りになられましたけど……？」

彩乃が答えた。

厨房を覗くと確かに亮がいた。何事も無かったかのように料理をしている。

「流石ね……亮……ふふふ」

そんな明日香を見て、厨房にいた冬夜が言った。

「亮はだんだん明日香さんのくだらないセクハラ発言をスルー出来るようになってますね」

饒舌な冬夜の発言。爽やかな笑顔付き。

しかし、明日香は「くだらない」の部分が強調されているように感じた。

「くだらなくないよ。美少女とか可愛い子を襲うことが私のポリシ  
ーなんだから！」

「ねえ、亮。そっちは出来た？」

「……もうちょいってとこだな」

「……………」

元気よく自分のポリシーを発表した明日香の周りに、冷たい風が吹いているようだった。

「あら？」

明日香の後ろで苦笑いしていた彩乃は、店のドアが開き鈴が鳴っ

たことに気がつく。

振り向くと、そこには凧がいた。高校の制服姿だった。マフラーを身に付けていて、外の寒さから少し頬が赤くなっていた。

「凧さん。こんにちは」

「こんにちは……」

凧は彩乃に小さくお辞儀をした。

凧が来た事に気づいた冬夜が少し口元を緩ませながら言った。

「お。ほーら、明日香さん。愛しの凧君が来ましたよ」

「……とっくに行った」

冬夜の挑発に対し、亮が小さく呟く。

確かに店の入り口付近に明日香がいた。もちろん、凧を抱きしめている。

「待ってたよおおおお！ 凧君！ 制服姿も可愛いね！ まるで美少女が男子の制服着てるみたいだよ！」

「あの……苦しいです……あ、でも暖かいかな……」

凧の態度は最初に抱きしめられた時に比べるとだいぶ冷静だった。そして、最近急に冷え込んできたので明日香の少し高い体温に落ち着きを覚えていた。

そんな様子を見て、そろそろ別のスキニップにすべきか、と明日香は考える。

「今日からこの店で働くんだよね、凧君」

冬夜が厨房から出てきて言った。

「は、はい。よろしくお願いします!」

「元気があってよろしい! じゃあ凧君。まずはこっちにおいで」

明日香は凧を連れ、厨房の更に奥へと向かった。冬夜はその様子を見て口元を緩ませた。

「じゃあ今からお仕事に取り掛かってもらいます。っとその前に…この店の制服に着替えてもらおうかな?」

明日香は凧を店の休憩室に連れ込んだ。

机の上に置いてあった紙袋の中から、おもむろにこの店の制服を取り出す。

しかしその制服は……

「どっ?」

「どっって……これ女性用じゃ……」

凧は不安そうに言った。

確かに、明日香が手に持っている制服は女性用だった。



「まずは聞いて？ この店では女性が接客担当で男性がキッチン担当なんだけどさ……キッチンの担当はあの二人に任せておけばほぼ大丈夫なの。だから、凧君にはホールを担当して欲しいんだ。でもね……生憎男性用の制服は厨房用のしかないのよね。でもまあ、凧君なら全然違和感ないしこれで大丈夫だよ！」

明日香が挙げた理由はもちろん嘘だった。ただ単に、凧に女性用の制服を着せたいというのが本音だった。

「そうなんですか……？」

不自然極まりない明日香の嘘。しかし、凧はそれを信じてしまったようだった。

若干上目遣いになりながら明日香に確認する。

「そうなのよ……だから、悪いけどこれをお願い。ねっ？」

「う……わかりました……」

その答えを聞き、明日香は内心ガッツポーズをしていた。手に持っていた制服を紙袋に戻し、凧にその紙袋をしっかりと渡す。

「更衣室はそこにあるから着替えておいで」

「は、はい」

ボタン、と更衣室のドアが閉まる音がする。

休憩室に一人残された明日香はニヤニヤが止まらなかった。

そこに、ひよこっつと顔を出したのは冬夜だった。

「明日香さん、上手く騙したみたいですね。笑顔が気持ち悪いくらいですよ」

「何言ってるの、騙してないわよ？ 騙したといえは本当は私がキツチンとホールのどっちも担当してるってことくらいよ。そして、あの子にはあの制服が正しい」

「そうですかねえ……」

冬夜は訝しそうな声で言った。いくら風の容姿が可愛いからといって、流石に女性用が似合うとは思っていないようだった。そんな彼に明日香は確信を持って言う。

「そつよ」

「……仕方ないよなあ……これしかないようだし……」

更衣室に入り鍵を閉める。

風は手に持っていた紙袋を見て呟いた。

更衣室の奥に進むと、自分の名前が書かれたロッカーを見つける。

「わっ。僕のロッカー用意されてた……」

自分のロッカーがすでに用意されていたことを少し嬉しく思い、嬉々としながらロッカーを開ける。

凧は持っていた紙袋を一旦置き、制服を脱ぎ始めた。きめ細かで白い肌が空気に直に触れる。

紙袋から制服を取り出し、少し悪戦苦闘しながらも何とか着ることが出来た。

そして、紙袋の奥に入っていたものを見つける。

「……長い靴下だなあ……これも履くのかな……」

凧は履いていた靴下を脱ぎ、一つにまとめてロッカーの中へ置く。そして黒いニーハイソックスを履き始めた。もちろん初めて履くので、少し履くのに苦労する。

なんとかニーハイソックスを履くと、ロッカーに自分の制服などを整頓した。

紙袋もロッカーにしまおうとすると、まだエプロンを着用していなかったことに気がつく。

黒いエプロンを制服の上から着用し、今度こそ全ての荷物をロッカーに整頓する。

その後、たまたま更衣室に置いてあった置き鏡で自分の姿を見て、激しい羞恥心に見舞われた。

制服とはいえ、フリルのスカートにニーハイソックスを着用するのはどうしても抵抗があった。

凧は容姿は美少女と遜色ないがれっきとした男子だ。自分が男子である事を誰よりも信じているのも彼だ。

しかし、この姿はどう見てもウエイトレスであり男子のする格好ではない。

そんな自分の姿に我慢して更衣室の鍵を開ける。いざ更衣室から出ようとした時、急にこみ上げてきた恥ずかしさと恐れでいっぱいになった。

きつと大丈夫だと自分に言い聞かせ、恐る恐る更衣室のドアを開けた。

「明日香さん……」

「何……?」

「正しかったようですね……」

「だね……自分でもちよっと驚いちゃった……」

明日香と冬夜は、更衣室から出てきた風の姿を見て言葉を失った。そこにいたのはどこからどう見ても美少女のウエイトレスだった。

「可愛すぎる……風君っ!!」

その姿に驚き立ち尽くした明日香は、思わず風に飛びついた。風の姿に激しく悶えながら彼に頬ずりする。頬ずりをされた風は、初めて抱きしめられた時のような反応をする。

「あっ、明日香さんっ……やめてくださいっ」

「ああああ……可愛すぎるっ!!」

「明日香さんっ! 苦しいですって!!」

風は割と本気で苦しがっていたが、明日香は一向に辞めようとし

なかった。

今の彼女には何を言っても無駄だった。彼女にとって美少女にスキんシップをすることは基礎代謝と変わらない。

その後も、彼女は我を忘れて尻に頼ずりを続けた。

唯一そのスキんシップを止めることが出来る天敵、亮が来るまでは。

「……そろそろ辞めろよ」

「いでっ……」

厨房から様子を見に来た亮が明日香に容赦なく拳骨を加えた。

尻は明日香の腕の力が緩んだ隙に亮の後ろへと避難する。

「……はあ、あんまりそういうこと続けると尻に嫌われますよ?」

「ええ！ それは嫌だよ!」

亮の注意に明日香は衝撃を受けた。

当たり前のように行うスキんシップをして嫌われてしまうなんて我慢できなかった。

「……じゃあ過度のスキんシップは自重してください」

「ちえっ……わかったよー……」

嫌われないためならやむを得まい、と明日香は納得する。

亮は少し安心したような顔になる。

そして、自分の後ろに隠れていた尻に目をやる。

「……しかし……何故そんなに似合った？」

「う……あんまり聞かないでくださいっ」

凧は少し頬を膨らませそっぽを向く。

明日香はその素振りを見て再度スキンシップをしそうになるも、  
亮の言葉を思い出し何とか自分を制御した。

「いやー、見てて楽しいなー」

そこに笑顔の冬夜が声を掛ける。

亮はそんな冬夜に、若干不機嫌そうに尋ねた。

「……てかお前、どうして明日香さんを止めようとしなかったんだ  
よ」

「えー？ だつてさー」

「？」

冬夜が黒い笑顔を浮かべる。まるでこの状況を心から楽しんでい  
るような顔だった。

「止めない方が楽しそうだと思ったんだもん」

「では凧さん。私が今からこのカフェでのお仕事を詳しくお教え致

しますね」

「は、はい。よろしく申し上げます、彩乃さん」

彩乃が優しく丁寧な口調で凧に言った。言葉の端々で小さな身振り手振りを入れている。

凧の目にはそれが可愛らしく映る。サバサバしていて男勝りな面がある明日香とは正反対のタイプだった。

彩乃は仕事を一通り説明する。レジ打ち、接客やトラブルへの対応、店内の清掃の仕方など滞りなく凧に説明した。

凧は分からないことがあったら質問するように言われていたが、彩乃の説明が分かりやすかったこともあり特に質問をせずに済んだ。そして、彩乃の提案により次に来た客に対して初めての接客などをしてみよう、ということになった。

凧は少し緊張しながらもお客を待つ。この時点で、分が女性用の制服を着て完全なウエイトレスになっていることを忘れていた。

そして、店のドアが開き鈴が鳴る。

「凧さん、来たようですよ。頑張りましょうねっ」

「は、はい……緊張するなあ……」

二人は店内へと出て行った。

「いらっしやいませ。カウンター席とテーブル席、どちらにいたしまししょう?」

凧にとっての初めての客は中年の女性だった。マフラーとコートがよく似合う気品のある女性だった。

女性は「そうねえ……」と考えた末にカウンター席に腰を掛ける。

「よいしょっと……それじゃあ、暖かいコーヒー頂けるかしら？」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

凧はそう言って厨房へ向かう。隣でその接客の様子を見ていた彩乃は少し微笑んだ。

「明日香さん、ホットコーヒーお願いします」

「オッケー。ちょっと待っててね」

彩乃の話によると明日香の淹れるコーヒーは凄く美味しい。凧は明日香がコーヒーを真剣に淹れる姿を見てそんなことを思い出していた。

スキンスリップをするときは違い、凛々しい顔だった。凧はその表情に少し見惚れる。

「はい、出来たよ。頑張ってたね」

「は、はい。頑張ります」

明日香に良い匂いを放つコーヒーが入ったコーヒーカップを渡される。少し熱かった。

凧は受け取ったコーヒーカップを慎重に持ちながら店内へと戻り、中年の女性に出す。

「お待たせいたしました、ホットコーヒーになります」

「ありがとうございます。可愛いウェイトレスさんね。ふふっ」



この女性も風の姿を見て完全に女の子だと思っていたようだ。

「えと……ありがとうございます」

僕は男です、と言いそうになったがなんとか言葉を飲み込む。そして素直にお礼を言った。

「新人さんなのかしら？」

女性が尋ねる。

風は少々戸惑いつつも答えた。

「は、はい。今日からこのお店で働く事になりました」

「あらあら、じゃあこれからお仕事頑張らなきゃいけないわねえ。

お名前は？」

女性は優しくそんな笑顔を浮かべ、包容力を感じさせる口調で会話を続ける。

「ゆ、幸村風と申します。よろしくお願いいたします」

風はぺこりとお辞儀をする。

女性にはその初々しさ溢れる態度に更に笑顔になる。

「あらまあ。彩乃ちゃん、この子本当に可愛い新人さんねえ。娘にしたいくらいよ」

「ふふっ、奥様もこの子のことを気に入ったようですね」

凧は女性と彩乃のやり取りを横で見ている。何だか親しげな雰囲気から、女性はこの店の常連なのかと思案する。すると、テーブル席に座っていた客がこちらに向かって声を掛ける。

「すみませ〜ん」

「お客様がお呼びなので私はこれで失礼いたしますね。じゃあ凧さん。頑張ってくださいね」

「は、はい」

彩乃はそういって、少々急ぎ足でテーブル席の方へ向かった。女性は再び凧に話しかける。

「このお店のスタッフさん、皆いい子達よねえ」

「そうですね……皆さんとても人柄が優れています」

「あなたも早く馴染めるといいわね。頑張ってねえ。おばさん応援しちゃうわよ？」

「っふふ。はい、ありがとうございます！」

女性は優しくそんな笑顔と小さなガッツポーズを見せた。

凧は思わず顔が綻び、こちらも心からの笑顔を女性に向ける。

女性もその笑顔を見てとても嬉しそうな顔をした。

その後も凧と女性は他愛も無い会話を続けていた。

そうしている内に時間が経ち、女性が席を立って言った。

「あら、そろそろ帰る時間ね。なんだか楽しくて時間を忘れちゃったわ」

「ありがとうございます。こちらこそ、とても楽しい時間を過ごせました。それではレジの方へどうぞ」

凧は彩乃に教えられたとおりにレジ打ちの作業を行った。なんとか失敗もなく終わらせることが出来た。

女性は店を出る時、凧に小さく手を振った。凧はそれに対し小さくお辞儀をして返す。

お客さんの笑顔を見ると嬉しくなる、という感覚を味わった気分だった。

その後、慣れないながらもなんとか営業終了時間まで働き続けることが出来た。

こうして、凧にとっての一日目が終わる。

「お疲れ様、凧君っ」

「明日香さん、お疲れ様です」

営業時間が終了し、店の内部にある休憩室に5人が集う。

凧を中心にして他の4人が彼を囲う形だった。

明日香は凧の頭を優しく撫で労いの言葉をかける。

「……仕事は大体分かったか？」

「はい。彩乃さんの教え方が上手だったお陰で……」

「……そうか、それは良かった」

亮が小さく微笑んだ。

彼の隣にいた彩乃が明日香に撫でられている風に向かって優しい口調で言う。

「私のおかげではありません、風さんの覚えが早いからですよ」

「そんなことないですよ……？　ありがとうございます」

「あらあら……謙虚ですね、ふふ」

小動物のような風のお辞儀。

そんな可愛らしい行動に彩乃も微笑む。

「一日目にしては凄く良かったんじゃないかな？　亮なんか一日目は凄く大変だったのにさ」

冬夜が言った。

後半の発言に亮が過敏に反応する。

「……冬夜！　それは絶対に風や彩乃に言うんじゃないぞ……！」

「えー、どうしようかなー？」

「あ、でも私も知ってるしなー？」

「……明日香さんまで!!」

冬夜と明日香が亮の反応を見てからかい始める。  
そんな中、残された彩乃と凧の頭の上にはクエスチョンマークが  
浮かぶだけだった。

「亮さんにもそんな時があつたんだ……」

「なんだか気になりますね……」

二人が亮をからかっている隣で、凧と綾乃は顔を見合わせ不思議  
そうにしていた。

そんな中、明日香は凧の体を抱き寄せて言った。

「ま、何はともあれこれで凧君も正式に仲間入りだね!」

「仲間……」

「これから頑張つてごうね! 凧君!」

「っ……はい!」

明日香の言葉に、凧は力強く答えた。  
そして……

「じゃあスキップしよっか! ぎゅっつっつっつ」

「苦しいですっ! 明日香さん!」

騒がしくも楽しそうな声が休憩室内に、そしてカフェ全体に響き

渡った。

「あら？」

ふと窓の外を見た彩乃が声を上げる。

その声に釣られて他の4人も窓の外を見た。

凝結によって水滴が伝う窓からは真つ暗な外、そして……

「雪だー！」

白くふわふわした結晶が舞い降りていた。

決して降雪量が多くないこの地域では珍しい出来事で、明日香が少し嬉しそうな声を上げる。

「そういえば……もうすぐ大晦日だね」

冬夜が言った。亮と彩乃はその発言で初めて今が年末の時期だということに気が付く。

「……確かにな」

「最近はずいぶん忙しかったですからね……危うく忘れてしまつところでした」

その時だった。

明日香が思い立ったように言った。

「そうだ！ 凧君の歓迎会もしたいし今年はここで年越ししようよ！ 確か皆一人暮らしでしょ？」

「俺も流石に一人の年末は寂しいなー、明日香さんナイスアイデアです」

「楽しそうですね！ とってもいい考えだと思います！」

「……まあ、確かに一人で過ごすよりはいいだろうな」

凧以外は全員乗り気なようだ。

一人その場の盛り上がりについていけない凧は戸惑っていた。

「凧君！ 後は凧君次第だけどどうする？ 皆で凧君の歓迎会したいから出来ればOKして欲しいんだけど……」

明日香が凧に頼み込むように言った。

凧は少し潤んだ目をしながら、ゆっくりと頷いた。

「じゃあ決まりね！ てか、なんで凧君ちょっと泣きそうなの？

……そんな凧君も可愛い……けど」

亮は何かを理解したような顔で言った。

「……凧は一人じゃない、ってこと。少しは分かったか？」

そんな亮の発言が凧の涙腺を崩壊させるきつかけとなった。

その後、泣いた凧を慰めようと明日香が抱きしめる。彩乃はおろおろしながらハンカチを取り出していた。

状況があまり理解できていない冬夜は、得意の読心術でなんとか彼なりに状況を理解する。

そして原因である亮は……

「……言わなくてもよかったな」

少し反省していた。



## 僕の初日はウェイトレス姿（後書き）

小説内でも書いてみましたがそれぞれの担当は

明日香（キッチン&ホール担当）、亮（キッチン担当）、冬夜（キッチン担当）、彩乃（ホール担当）、凧（ホール担当）です。

そして当初より泣き虫な気がする凧君でした。

年越しに便乗し……じゃなくてタイムリーにするために次は年越しの話でも

僕の元旦は優しい先輩達と（前書き）

なんか風のキャラが崩れてる気がしないでもないです。  
それと、亮の周りに不穏な空気が流れ始めました。

## 僕の元旦は優しい先輩達と

「あけましておめでとー！！」

酒に酔って普段よりも明らかにテンションが高い明日香が高らかに叫んだ。片手に持っていたアルコール飲料の缶を持ち上げる。

新年を迎えたこの時、カフェ『さざなみ』のスタッフ一同は明日香の部屋であるカフェの二階にいた。

同じ部屋に五人が集まったとはいえ、人口密度がかなり低かった。テーブルにはアルコール飲料を飲み干した空き缶がたくさん置いてあった。ほとんどが明日香によるものだった。

また、亮と冬夜が作った料理のほとんども五人で食べつくしていた。食べつくされた料理の皿が大きさ毎に分けられて重ねられている。

ハイテンションな明日香の隣には凧がいた。足を崩して立ち膝な明日香とは逆に、小さく正座していた。

楽しそうに口元を緩ませ、隣の明日香を見上げている。

「明日香さん楽しそうですね」

「もっちろんよ！　じゃあ、新年最初の……ぎゅっぎゅっぎゅっ」

「新年早々苦しいです……明日香、さん……っ」

抱きしめられている凧は無抵抗だった。逃げるという選択肢を既に捨てた彼は、大人しく明日香の腕に包まれていた。

その様子を見てた冬夜が亮に話しかけた。

「なんかさ、凧君とは出会ってそんなに経ってないのに……この光

景への慣れはなんだろう？」

「……さあな……毎日のように見ているからじゃねえのか……ふああ」

「あれー、亮君。眠いのかなー？ まだ一時回ったばっかなのにー。お子ちゃまですわね……むぐぐ」

「……黙れ冬夜」

「新年早々喧嘩はいけませんよ？ 亮さん。冬夜さん」

わざとらしく挑発を仕掛けた冬夜の口は、亮の右手によって塞がれる。

若干眠気を催し始めた彼にとって、冬夜の挑発は神経を逆撫でするものでしかなかったようだ。

彩乃はそんな二人の様子を見て、「なんとかしなければ」といった使命感に駆られたらしい。子供の喧嘩の仲裁に入るように宥めた。

「凧君もさー、お酒飲んでみるー？」

「だ、駄目ですよ。僕はまだ未成年ですっ」

酔った明日香は凧にアルコール飲料の缶を見せて言った。

凧は慌てて断るが、明日香はそれを聞こうとしない。

「お正月くらいはさー、飲んでもいいんじゃないー？」

「だから駄目ですっばー！」

「そう言わずにさっ」

「ふう……」

凧は亮に助けを求める眼差しを向けた。

困り果てた凧の顔を見て、亮が立ち上がったと言った。

「……凧、これからコンビニ行くけどついてくるか？」

「え……あ、はい！ 行きます！」

亮の言葉の意図を理解した凧は、勢いよく答える。

明日香の腕からなんとか抜け出して亮の傍へと寄った。

「……つーわけで、コンビニ行ってくる。冬夜と彩乃は明日香さんの面倒見ててくれ」

「わかりました。夜道なのでお気をつけてくださいね」

「いつてらっしゃい。あ、そういえば……お雑煮作ろうと思ったけど肝心の餅が無かったなあ。悪いけど買ってきてくれないかな」

「……わかった。凧、行くぞ」

「はい。……あ、ちょっと待ってください」

「……？」

何かを思い出したように凧が言った。

亮は首を傾げる。そして、彼がとった行動を見て小さく微笑んだ。

彼は部屋の隅にたたまれて置いてあった数枚の毛布のうち、一枚

を手に取る。そして、それをいつの間にか眠っていた明日香に掛けた。

その様子を見ていた冬夜と彩乃が声を上げた。

「おー……」

「あら……お優しいですね」

「明日香さん。行ってきます」

「んむゆ……にやう……」

ぐっすりと眠っている明日香の頭を軽く撫で、凧は亮の傍へと戻る。

「お待たせしました」

「……ふふつ。じゃ、行くか」

「はいっ」

凧は起きていた冬夜と彩乃にも「行ってきます」と言っつて部屋を後にした。

亮はそんな微笑ましい彼の行動を、まるで兄のように優しく見守っていた。

「亮さん。ありがとうございます」

「……流石に未成年に酒飲ますわけにもいかねえからな」

二人は並んで夜の道を歩いていた。等間隔に設けられた街灯が、暗い夜道を少し照らしている。

夜の野外は気温が低く、息は吐かれると白く変化した。歩く度に少しだけ積もった雪がキシキシと音を鳴らす。

「明日香さんって酒癖が悪いんですか？」

「……まあ、悪い部類に入るだろうな。いつもより更に変態になる」

「ふふつ。変態って」

凧が無邪気に笑った。

その様子を見て、亮も少し微笑んでいた。

「……凧は明日香さんにああして絡まれるの、好きなのか？」

「ええー……どうでしょうね。安心はしますが……」

「……ふつ。なら、好きってことか」

「それとはまた違いますよー……多分」

「……多分？」

「ふふつ。……まあ、実を言うと結構好きだったり。明日香さん暖かいし……」

「……そうか、じゃあ明日香さんに伝えとくな」

「亮さんー。それはやめてくださいよ？」

風がまた楽しそうに笑った。その顔を見て、亮は初めて出会った時よりも仲が深まったように感じていた。

目の前で笑う可愛い弟のような風を見て、亮は少し物思いに耽る。そうしているうちに、コンビニが見えてきた。

「いらっしやませー」

店内は深夜ということもあり人が少なかった。亮は買い物かごを手に取り、切り餅を探す。

少し奥へ進んだところで、切り餅を発見し買い物かごに入れた。それを見ていた風が尋ねる。

「お餅ですか……？」

「……後で冬夜と雑煮でも作るうかと思っただけ」

「へえ。じゃあ楽しみにしてます」

「……ああ。それと、何か買いたい物はあったか？」

「んー。特にありませんけど……何か飲み物でも買って行きますか」



「？」

「……そうだな」

亮と凧は飲み物が陳列されている場所へと向かう。

烏龍茶や麦茶などのお茶のペットボトルを買い物かごに入れる。

凧はその他に一本、水のペットボトルもかごに入れた。

それを見て、亮が尋ねた。

「……凧は水が好きなのか？」

「あ、いえ。明日香さん結構たくさんお酒飲んだので……」

「……優しいな。毛布のことといい、特に明日香さんには」

「べ、別にそんなことっ」

「……ふふっ。隠さなくてもいい。それで、買う物はこれでいいか？」

「う……はい」

亮は買い物かごを持ってレジへ向かった。凧はその後ろについていく。

「亮さん、先に外で待っててもいいですか？」

「……ん？ ああ、いいけど外は寒いんじゃない？」

「むしろ店内が少し暑いので……へへ」

凧は苦笑いして、店の外へ一足先に出て行った。  
確かに、少し頬が赤かった。

「……まあ、厚着だし無理もないか……」

亮は呟いた。

「あー……涼しい」

凧は外の空気に触れ、そんな感想を漏らす。顔の火照りを覚ますのにちょうど良い風が吹いていた。

気温の低い静かな空間の中で耳を澄ましていると、笑い声のようなものが聞こえてくる。

「それでよー……っておい。あれ見るよ。すげー可愛い子がいるぜ」

「ホントだな。声かけようぜ？」

金髪で耳や鼻にピアスをしている男と、モヒカンで風船ガムを膨らませている男が凧を見て言った。じゃらじゃらとしたシルバーアクセサリーがだらしなく腰から垂れていた。

「ねえねえ、君。俺らとどっか行かね？」

「な、なんですか？ やめてください」

金髪の男が凧の肩に腕を回す。

凧は小さく体を震わせ、怯えた様子を見せる。

「そう言わずにさ、行こうぜ」

もう一人のモヒカン男が凧の腕を掴んだ。

凧は非力ながらも抵抗する。

「は、離してください！ っ！」

中々思い通りにいかないことに腹を立てたのか、金髪の男が声のトーンを低くして言った。

「君は一人で、俺らは二人。下手に抵抗しない方がいいんじゃないか？ なあ？」

「っ……………」

凧の目に涙が浮かぶ。

先に一人で店内から出てきたことを後悔した。一刻も早く亮が店から出てくることを祈った。

「……………何してんだ」

「なんだてめえ。こいつの彼氏か？」

「彼女さん、俺らと遊ぶってよ。だからお前は帰れ帰れ」

二人という安心感からか、強気な発言や嘘極まりない発言をする

男達。

下品な笑みを浮かべる二人の男を見て亮はため息を吐いた。

「……どうでもいいからその手離せ。それと、そいつは妹だ」

「なんだ、兄妹かよ。だったら……ぐああああ」

亮は凧の腕を掴んでいた男に近づく。そして、その腕を更に掴んだ。

かなりの握力で腕を掴まれた男がうめき声を上げた。

そして、男達を睨む。殺意さえも感じさせるような眼光に、男達が怯む。

「あああああ！！」

「な、何してんだ！ お前！ 離せよ！」

「……ふん。凧、早く帰るぞ」

亮はそう言うと、凧の腕を少し強引に引いてその場を後にした。

「亮……さん」

「……ホント絡まれやすいな、凧は」

「すみません……」

コンビニからの帰り道。凧はずっと亮に腕を引かれていたままだった。

少し歩いた頃、亮が立ち止まる。そして手を離した。

「……もう大丈夫だろう。腕が痛かったらスマン」

「いえつ。大丈夫です……助けてくれてありがとうございます」

「……ったく。別に礼なんかいらねえよ」

ぼん、と凧の頭に手を置く。

凧は俯いていた顔を上げ、亮に気になっていたことを尋ねた。

「そういえば……なんでもあの時、妹って言ったんですか？」

「……………」

亮は無言だった。

至って真剣な目で、凧は答えを待つ。

「教えてください……」

ゆっくりと、亮が口を開いた

「……なんとなくだ。カップルに思われるよりはいいだろ？」

カップルと思われることを避けるために、亮はとっさに兄妹という嘘を吐こうとした。

しかし、凧は納得がいかない顔で言う。

「だったら弟の方が正しいと思います……」

「……妹の方が現実的だ」

「なっ……現実も何も僕は男です！」

凧は言い慣れた台詞を叫んだ。

そんな凧に平然とした顔で亮が言う。

「……実際妹で通用した」

凧は再び俯く。

そして、少しもじもじしながら言った。

彼の様子が変わったことを亮は不思議に思う。

「でもっ……なんかおかしいです。その……お兄ちゃん……の言う  
こと」

「……な！！ お兄ちゃんってお前なあ……」

「妹って言ったのは亮さ……お兄ちゃんですっ」

凧の「お兄ちゃん」呼びになんとも複雑な心境になる。

亮はなんとなく言ったあの台詞を死ぬほど後悔した。

「みんなの前でもこうやって呼んで恥をかかせますから……覚悟し  
てくださいねっ」

よほど「妹」という台詞が嫌だったらしい。凧は目を瞑って舌を

出す。

凧の予想外の行動に、亮は気が重くなりながら歩くことを再開する。

そして、いつそのこと謝った上でこの呼び方を辞めることを頼んだ方がいい、と考えた。

「……妹と言ってスマン。だからその呼び方はやめてくれ……」

「もう遅いです。お兄ちゃんの自業自得ですっ」

凧が亮を先回りして、彼の前に立って言った。

亮にはその姿が少し楽しんでいるように見えた。

「……あー。なんて言い訳すっかな……」

「へへっ。なんだか気が重そうですね、お兄ちゃん！」

「……誰のせいだ……」こら

亮は凧の首筋に手を当てる。

低い気温で冷えていた手に、凧は体を震わせた。

「ひゃっ。お兄ちゃん、冷たいですっ」

「……なんで楽しそうなんだよ」

「そ、それはー……気のせいです！ それより早く帰りましょうー！」

「……ったく」

亮は足早に先を行く凧を見て、心の中で呟く。別に妹と呼びたくて呼んだ訳じゃないことを。現実的と言ったことが、本当は微塵もそう思っていないことを。

実際、亮は凧のことを弟のように感じている。自分を慕ってくれる彼には家族のような愛情が沸いていた。

「お兄ちゃん。どうかしましたか？」

先を歩いていた凧が近寄ってきて彼に尋ねた。

亮は何も言わなかった。

「お兄ちゃん……？」

お兄ちゃんと呼ばれた時、亮は凧を本当の弟のように感じていた。と同時に、恐怖感も感じていた。

しかし彼はそれを口にするにはしなかった。口に出来そうもなかった。

自分にとって弟という存在がなんなのかということ。

「……………弟か」

「？」

亮は小さく呟いた。

凧は彼の様子を疑問に思いながらも、再び先を歩き始めた。

その後ろを、ゆっくりと亮も歩いていった。



「ただいま帰りましたー」

「……ただいま」

凧と亮が部屋に戻ると、みんな起きていた。外出前はぐっすり眠っていた明日香も起きている。三人で他愛もない話をしていたようだった。

「あ、おかえりー。二人とも」

「おかえりなさい。凧さん、亮さん」

「おかえりー、凧君、亮ー……あー、頭痛い」

いつもとは違い、明日香はなんだか元気が無さそうだった。凧は明日香の隣で膝を着いて言った。

「明日香さん……やつぱ飲みすぎですよ……ちゃんと水買ってきて飲んで飲んでくださいなね」

「ありがと……気が利くね」

「……ほら、水」

亮がコンビニの袋から水のペットボトルを取り出す。それを凧に渡した時だった。彼は受け取る際に、あの呼び方を実行した。

「ありがとございませす。えと……お兄ちゃんっ」

「……………本当に言うとは」

せめてハツタリであることを願った亮だった。しかし、その願いは脆く崩れ去った。

部屋の中が凍りつく。その空気に、亮は内心頭を抱えていた。

「亮……………私の可愛い凧君に何吹き込んだの？ 答えによっちゃただじゃおかないわよ？」

「亮さん……………そのような呼び方を強要するなんて」

「亮……………ついに越えてはいけない線を越えちゃったのか」

明日香、彩乃、冬夜の三人が亮に対して言った。明日香に至っては殺気が見え隠れしている。

そして冬夜はニヤニヤしている。

「……………ちげーよ。誤解だ誤解。冬夜ニヤニヤすんなアホ」

「僕のこと妹って言ったのはお兄ちゃんです」

亮の言い分に対しすかさず凧が言った。

再び部屋の中が凍りつく。

「亮、ちょっと表出なさい」

「亮さん。いくらなんでもそれは……………」

「亮。気持ち悪い……………ぶくく」

再び三人が順に言った。冬夜が笑いを我慢し始めたことに亮は苛々する。

「……あの状況の場合仕方無かったんだよ。そして冬夜、後で殴らせる」

亮はその後、凧のことを妹と呼ぶに至るまでの経緯を皆に説明した。

彼にしては珍しく、必死に弁解しようとする。流石にこんなことで信用を失うわけにはいかなかった。

その努力も実り、なんとか誤解を解くことに成功した。

「ねーねー、私のこともお姉ちゃんって呼んでよ」

「えー。嫌ですよー……」

「なんでー？ いいじゃん。凧君は可愛い弟みたいなもんだしさー」

「弟……ですか？ ……明日香お姉ちゃんはちゃんと弟として扱ってくれるんですね。ありがとうございます」

「きゃあああ！ 可愛いー！」

「あらあら。本当の兄妹みたいですね。ふふっ」

三人が仲良くじゃれあつてる部屋の外。一階と二階をつなぐ階段がある廊下で亮と冬夜が肩を並べて話をしていた。

「ねえ、凧君なら本当に妹でもいいと思わない？」

「……何言つてんだお前。アイツは男だろ。正しくは……」

「弟、つて言いたい？」

「……」

亮の表情が曇る。

冬夜はいつもと変わらず穏やかな顔つきだったが、口調は明らかに違った。

まるで亮の心理を全て理解しているかのように冷静で真剣だった。

「やっぱり、まだ克服してないね。弟つて存在にさ。だからあの子との関係を偽る際、妹つて表現したんだろ？ まあ、別に偽る必要は無かつたんじゃないかと思うんだけど」

「……別に。カップルと思われたら凧が嫌がるだろうと思った、まあ俺も嫌だが。だったらまだ兄妹の方がマシだ。それに、凧の容姿なら妹の方が……」

「本当にそう思ってる？ 俺の前じゃ嘘が意味無いこと、付き合い長けりゃわかるでしょ。」

冬夜は淡々と続けた。

「少なくとも理解してるよ。僕と明日香さんはさ」

「……」

「ちょっと静かにしてみようか？」

亮と冬夜は口を閉じ、耳を澄ます。

部屋の中から明日香の声が聞こえてくる。

「凧君。亮のことはもう、お兄ちゃんって呼ばない方がいいんじゃない？」

「どうしてですか？」

「たとえ冗談でもさ、流石にちょっと可哀想じゃん？ あんなたじたじな亮は初めてだったけどっ」

明日香の笑い声。

亮が冬夜に何かを言おうとすると、冬夜は口の前で人差し指を立てた。

「それに、亮はね。弟って言葉が嫌らしいんだよねー」

「どうしてですか？」

「それはー……その。色々とね。とにかく、もうお兄ちゃんって言っちゃ駄目だよ？ 代わりに私のことはいくらお姉ちゃんって呼んでもいいからねっ」

「……よく理解できませんが、そうします。明日香さん」

「あら。お姉ちゃんじゃないんだ……」

冬夜が亮に笑いながら言った。先ほどとは違いおどけた口調だった。

「はは、明日香さんもなんとかしようとしてるよ」

「……ああ」

「にしてもさ、無知って時に残酷だよな」

「……凧はこのことを知らなくていい……」

「そうなの？ 僕はそう思わないけどなあ」

「……繊細な一面がある凧には教えたくないんだよ……っ」

亮は普段見せないような怯えと焦りの表情をしていた。

「じゃあさ……お兄ちゃんって呼ばれてどうだった？」

冬夜はそんな彼に、少し冷たい声で尋ねる。

おどけた口調から急に冷静な口調に戻り、顔つきも真剣になっていた。

亮はしばらく考え、ゆっくりと口を開いた。

「……懐かしさと、怖さを感じた。特に凧の口から言われると……な」

「ふうん。やっぱり面影感じる？」

「……………ああ」

「んー……………いつまでもさ、自分責めなくていいんじゃないの」

「……………俺が悪いんだ。だから自分で自分を責めるのは当然だ」

「ホント不器用だね、亮は……………まあ、この話は終わりにしようか。新年早々暗いのもどうかと思うし」

今までの話の流れを断ち切るように冬夜が言った。口調も、普段の爽やかでおどけた口調に戻る。

亮は何かを言いたそうにしたが結局言わなかった。そして頷く。

「……………ああ。じゃあ、雑煮でも作るか」

「そうだねー」

「……………にしてもお前、気持ち悪いほど人の心を見透かすよな」

「ははっ、よく言われるっ。でも亮はそんな僕でも仲良くしてくれてたよねっ」

「……………お互いに友達いなかったからか？」

「ホントにストレートだなあ、亮は」

亮と冬夜はそう言い合いながら階段を降りて、厨房へ向かった。彼らが階段を降りた後に廊下へ出てきた明日香は心配そうに呟く。

「……無理しちゃ駄目だよ、亮」

「いただきまーす」

一同が言った。

そして、目の前に置かれている、美味しそうな匂いを放つ雑煮を食べ始める。

一口食べた凧が言った。

「美味しいですっ」

「そっか、よかったね。凧君っ」

明日香が凧の頭を撫で回す。

そして尋ねた。

「皆と過ごした感想はどうだった？」

「凄く楽しかったです！」

笑顔で凧が答える。

明日香はその笑顔に和み破顔する。冬夜や亮、彩乃も小さな可愛い後輩の笑顔に微笑んだ。

そんな中、亮は心の中で思い始めていた。

凧と関わるのが、自分の中にある過去しがらみを解くことにならないのではないかと。



そして、考え込む亮を見ていた冬夜は誰にも聞こえない程小さな声で呟いた。

「……それは違う。むしろ危険だよ。亮……」

平穏な元旦の中で一部。不穏な思いが流れ始めていた。

しかし、明日香や亮、冬夜は五人が集まるとその不穏な思いは消え去る気がしていた。

こうして、凧の歓迎会を兼ねた年越しのパーティは幕を閉じた。

一同はこうして、カフェで働くいつもの日常へと戻っていく。

僕の元旦は優しい先輩達と（後書き）

元旦にうつろするはずが3日になってしまった……

**僕の友達に静かな少女（前書き）**

5話目は新キャラ登場です。

それと今回の話の視点は凧です。話毎にこころこころ変わってしまっ  
て  
申し訳ありません

## 僕の友達に静かな少女

「おはよー」

「おー、おはよー」

冬休みが明けしばらく経った日の、生徒の挨拶や話し声で少し騒がしい学校の校門。

僕は今日も一人で登校していた。

僕にはカフェ『さざなみ』のスタッフ以外に友人と呼べる存在がおらず、学校では一人で過ごす時間が極端に多かった。

教室に入り、鞆を置いて自分の机に伏せる。

話し相手のいない学校生活は、僕にとって憂鬱な時間だった。

「……早く学校終わらないかなー」

学校に来て数分、僕は口癖のように呟いた。勿論、学校が早く終わることなど無い。

クラス内を見回すと男子は男子で、女子は女子で数人のグループが出来ている。

しかし、この時の僕の心境はカフェ『さざなみ』で働き始めて以来変化していた。

『さざなみ』で過ごす時間が長ければ長いほど、自分にも自分を大切にしてくれる人達がいる、ということを実感していた。

「……やっぱり早く学校終わって欲しいな」

『さざなみ』のことを考えると、この学校生活が余計に憂鬱な時間になってしまった。

僕は早く仕事場へ行きたい、と何度も思っていた。午前の授業中も、昼休みも、午後の授業中も。

放課後になり、生徒達は部活に向かう者と帰宅する者に分かれる。僕は当然の如く後者だ。

「やっと終わったー……早く行かなきゃ」

僕は昇降口から出て、身も心も晴れやかな気分になっていた。

ようやく仕事場へ迎えることに大きな喜びを感じていた僕は、少々急ぎ足で校門へ向かう。

その時だった。喧嘩をするような声が聞こえてくる。校舎の脇にある体育館の方だった。

気になった僕は体育館へ近づくと、だんだん喧嘩をするようなその声はつきりと聞こえてくる。

「……なんとか言えよ!」

「お前は……だよ!」

声の質からして女子だった。誰かを責めているような声だった。

僕は体育館の脇の倉庫へと近づくと、そして倉庫の中を恐る恐る覗いてみた。しかし誰もいない。

不思議に思った僕だったが、しっかりとその声は聞こえる。

次に、倉庫の外周を歩いてみた。

すると、ちょうど倉庫の真後ろである場所に数人の女子がいた。

僕はとつさに倉庫の陰に隠れる。

一人の女子を四人の女子が囲んでいた。

「クールなキャラ作りやがって！」

「どうせ男子に気に入られてるからっていい気になってんだろ！」

「ざけんなよブス！」

「その態度がムカつくんだよ！」

「……………」

あまりにもレベルの低い罵り。四人の女子は本気なのだろうが、言葉を聞く限りただの醜い嫉妬でしかない。僕は思っていた。

しかし、苛めには違いない。

四人のうち一人が、囲まれている女子を突き飛ばす。尻餅をついた女子は何も言わなかった。

苛められている女子は物静かで無口な女子だった。何を言われても、されても口を開こうとしない上、表情一つ変えない。

よく見ると、僕と同じクラスの生徒であることに気がつく。

「あの子は確か……………」

僕はクラスメイトの顔を一人ひとり思い出す。

しばらくしてから名前を思い出した。

「霧瀬菜奈さん……………だったっけ」

話したことは無いが大人しい人だ。

しかし、まさか彼女も苛めに遭っているとは思わなかった。僕はその光景を目の当たりにしても止めることが出来ない。現在進行形で苛められっ子だった僕は、どうもこういうことに臆病になってしまう。

そのまましばらく時間が経ち、数人の女子が去っていく。そして、それを見計らったように一人の男子がやってきた。

「霧瀬さん！ 大丈夫だった？！ ったく、酷いよなー。あいつらでもさ、俺が君の味方になるから安心しなよ」

僕の目には、その男子が本心から彼女を助けようとしているわけではないように見えた。

うわべを繕っただけの言葉を淡々と言う男子に、少し不快感を覚える。

人の心情を見抜くのが得意な冬夜さんもきつと同じことを感じるだろうと思った。

美少女で男子から密かな人気があるらしい彼女に、こうして近づいて自分を良く見せようとしているのが容易に理解できた。

「……………話しかけないで」

彼女はそう言って、その場を後にした。消え入りそうな静かで冷たい声だった。

彼女がいなくなった途端、男子が舌打ちをして呟いた。

「ちつ……………失敗か。いい方法だと思ったのに」

僕はその言葉を聞いて、その場にいることが嫌になった。

その場から走って校門を抜け、『さざなみ』へ向かう。

彼女に近づくために、彼女が苛められることを利用するなんて

最低だ。苛められる人間の気持ちは苛められた人間にしか分からないのに。僕はそう思っていた。

「あの、亮さん」

「……………ん？ どうした？ ……ふふ」

僕は亮さんに教えて欲しいことがあった。それは亮さんだからこそ分かることかもしれないと僕は思っていた。

それまでしていた作業を中断した亮さんは、ウエイトレス姿の僕を見て少し笑った。

「笑わないでください！ 僕だってこの格好、結構恥ずかしいんですから！」

「……………ふふ、悪い。でも、だいぶ慣れてきただろ」

亮さんは笑いながら言った。

確かに慣れてきてはいる。が、やはり服装のことを話題にされると恥ずかしい。

亮さんは全く悪びれていない様子だ。このお兄ちゃんめ。

「それはそうですが……………っていつか聞きたいことがあるんですけど」

僕は本来の用件を思い出して亮さんに言った。



頬を少し赤くしながらだったが、真剣な口調で質問する。

「亮さんはどうして苛められていた僕を助けてくれたんですか？」

「……その質問、前にもしたよな」

それまで笑っていた亮さんの顔から笑みが消える。

そして、中断していた作業を続ける。

「確かにしました。でも、今になってやっぱり疑問なんです」

亮さんが少し沈黙する。僕は答えを求めたくて仕方なかった。

その様子を見ていたであろう冬夜さんが僕に尋ねた。

「ねーねー凧君。今日、なんかあった？ 苛めの現場に遭遇したとか」

「はい……って、なんで分かるんですか」

「僕って読心とか得意だからさー。なんとなく」

僕は冬夜さんのことを時々エスパーのように感じる。とはいっても、それはこの職場の冬夜さん以外全員がきつと感じていると思う。

「で、亮さん。どうしてですか？」

「……そのうち教えてやる。今はまだ教えられそうにない」

「はあ……じゃあ、苛めの現場に遭遇したらどうしますか？」

その答えに更なる疑問を抱きながらも、僕は次の質問をする。  
最初の質問とは違い、亮さんはこの質問はすんなり答えた。

「……助けなければ、助ければいい。嫌なら、その場から逃げてもいい。正解はないと思う。苛めから助けたら、次は自分が苛められるかも知れねえし、苦しい目に遭うかもしれねえしな。無理して助けることが必ず正しいとは限らない」

亮さんは淡々と言った。

冬夜さんがそれに補足するように言う。

「まあ、亮は結局。自分なら苛めを止める。苛められているのが自分にとって特別なら、尚更ってことを言いたいんじゃないかな」

「なるほど……ありがとうございます」

僕はお礼を言ってその場を後にしようとする。

そんな僕に冬夜さんがからかうような声と口調で言った。

「苛められてる子、もしかして凧君の好きな子？」

「なっ……違いますよ。クラスメイトです。ただ……」

「ただ？」

「その子が苛められていることを知っていながら利用する人もいるので……」

「へえ……」

僕は言った。この件に関して一番嫌だった点を。すると、それを聞いていた亮さんが作業を再び中断した。そして僕に近づいてきた。小さな声で僕に助言する。

「……苛められることを嫌だと思わない奴はいないさ。それはお前自身よくわかってるだろ。だったら……」

亮さんの言葉の語尾が聞き取れないほど小さくなった。しかし、亮さんの口の動きを僕はしっかりと読み取っていた。少しだけ吹っ切れた気がする。

「亮さん……僕……そうします。ありがとうございます」

そう言って僕は仕事に戻った。

「……助けたい……か」

僕は離れた席を見る。

そこには霧瀬菜奈さんが座って静かに読書をしていた。

休み時間になっても、彼女は相変わらず誰とも話そうとしない。

ただ大人しく本を読んでいるだけだった。

話しかけようかと思ったりもしたが、結局出来なかった。

だが、その日の放課後……

委員会の仕事を終えて仕事場に向かおうとした僕は、人気の少ない階段を通った。

三階から二階へ降りる途中、偶然にも彼女への苛めの現場に遭遇

する。

僕は階段の踊り場からの死角になる、廊下の角に隠れた。そして恐る恐る階段の踊り場を見た。

「お前なんかびしょ濡れがお似合いなんだよ！」

昨日と同じく四人の女子が彼女を囲んでいた。

そのうちの一人がバケツに入った水を彼女の頭から被せる。彼女は一瞬で髪も制服もびしょびしょになってしまった。階段もその水で水浸しになる。

「……………」

「なんなの?! まだ何も喋らないわけ?!」

彼女がこの期に及んでも無口なので、水を被せた女子が発狂しそうになっていた。

僕はそれを見ていながらも中々一步踏み出せずにいた。足が小刻みに震える。

何を思ったのか、一人の女子がとんでもない行動に出ようとする。

「そうかよ……………! だったら喋れなくしてやる!」

「……………」

後ろは階段だ。このままでは階段から突き落とされてしまう。

僕は勇気を振り絞ってその場に割り込もうとするが、足が動かない。苛められていた時を思い出し体が硬直する。

苛められっ子の自分が誰かを助けるのはやっぱり無理なのか。

自分が苛められている時のことを思い出す。とても悲しかった。

寂しかった。辛かった。苦しかった。自分を追い詰めるような負の感情しか湧いてこないのが苛めだった。

「ウチらを見殺し続けた罰だ!!」

「っ……」

彼女の体が押され、階段から落ちそうになった時だった。僕は亮さんの言葉を思い出す。

『……苛められることを嫌だと思わない奴はいないさ。それはお前自身よくわかってるだろ。だったら……』

亮さんが最後に言った言葉。

その言葉が僕の足を動かす。そして、心を動かす。

『何が何でも絶対に助ける』

「僕に捕まって!」

僕は彼女の体が軽く宙に浮いた時に走り出していた。そして細い腕を掴む。そのまま彼女の体を自分の体全体で守るように、思い切り抱き寄せる。

そしてそのまま階段を滑るように転げ落ちた。鈍い音が何度も響く。物凄い衝撃が体を襲い、その衝撃が収まった頃には意識が飛ぶ寸前だった。

「っ……」

「な、なんだよコイツ!」

「これってやばいんじゃない……」

「あ……あ……逃げろ……」

女子達はその場から走って逃げ出す。その走る足音がだんだん聞こえなくなると共に、僕の意識は失われた。

「……痛っ……」

僕はそつと目を開けた。彼女に触れたために少し体が濡れていた。その体はだいぶ痛むが、幸い大きな怪我の痛みは無かった。

今まで何度も殴られたりしていたからかな。ちよつと複雑だった。それでもやっぱり苛めは嫌だけれど。

時間が経つにつれ、僕のぼやけた視界がだんだんはつきりと見えってくる。

「……大丈夫？」

「わっ……」

僕の顔を覗き込んでいた彼女に驚き体を起こす。そして、すぐに冷静になって聞き返した。

「えっと……霧瀬さんこそ大丈夫……？」

こくりと彼女は頷いた。そして静かに言った。

「菜奈で……いい。凧」

「え、あ……うん。てか、名前知ってたの？」

「クラス一緒だから……覚えてる」

僕の名前を知っていたことに驚きながらも僕は彼女を見る。

彼女は髪や制服が濡れていた。僕は制服の上着を脱いで渡す。

「寒いだろうから……着て」

「……ありがとう」

彼女はそう言って僕の手から制服を受け取った。

そして自分の肩に羽織る。

「そういえば、僕どのくらい気を失ってた……？」

「……一時間くらい。ずっと目覚ますの待ってた……目覚めて安心した」

一時間も傍で待っていてくれたのかと思うと、少し嬉しかった。そう思っていると彼女が小さな声で尋ねてきた。

「……凧」

「どっしたの？」

「どうして……助けた？」

どうして自分を助けたのか、と聞きたいらしい。  
僕は言葉に詰まりながらも答えた。

「どうしてって……その、菜奈のこと。なんだか放っておけなくて……同じ苛められる者として思ったんだ、やっぱり苛められたら悲しいし寂しいし苦しいだろうって。だから……」

「……………」

彼女の顔が近づき、僕の頬に彼女の唇が当てられた。

一瞬、思考が停止する。

そして、僕の顔は一瞬にして熱を持った。

「ななな、何してるの?!」

「……風みたいだな、初めてで嬉しいから……お礼」

「初めてって……?」

顔の熱が取れないまま、僕は聞き返す。

彼女は静かな声で言った。

「……今までも助けようと私に近づいた人はいた。でも、みんな本当に助けようとしてくれなかった。こういう状況を利用してた」

「菜奈も……そう思ってたの?」

またこくりと頷き、彼女は続ける。



「でも、凧は違う。……自分が怪我をすることも承知で必死に助け  
てくれた……ずっと独りだった私を本当の意味で助けてくれた……  
だから、嬉しかった」

彼女は冷静な表情を変えないまま言い終えた。

そして、僕の頬に手を当てる。

急な彼女の行動に少し吃驚する。

彼女は僕の目を見て小さな声で言った。

「凧、ありがとう……」

この時、彼女は微笑んだ。

その笑顔は明日香さんの明るい笑顔や、彩乃さんの優しい笑顔と  
は違い……どこか儂げで無垢で静かな笑顔だった。

それでも、二人に負けないくらい素敵な笑顔だと僕は思う。

菜奈の静かな微笑みに僕も微笑み返す。

彼女は微笑みながら言った。

「不思議……」

「何が？」

僕は聞き返す。

彼女はゆっくりとした口調で答えた。

「凧とは今話したばかりなのに……なんだか私は独りじゃないって  
……考えた」

「……似てる……以前までの僕と」

「……そう?」

僕は以前までという言葉を使った。

それは、今は独りじゃないと思えているからだった。

亮さんと出会って、明日香さんと出会って。僕は独りじゃないって思え始めた。

その後も冬夜さんや彩乃さんと出会って更にその思いが強くなっている。

彼女も皆と関われば、もっと強くそう思えるのかな。僕はそんなことを考え始めた。

そして、彼女に言った。

「菜奈……ちよつといい?」

「? ……うん」

「僕さ、以前までは助けしてくれる人とかいなかったんだ。でもね、ある日出会った人が僕を助けてくれたんだ。それから、その人が働いているカフェに行った。そこで出会った人達は皆素晴らしい人達だったよ。それからそこで働き始めたんだ。日を増すごとに、僕は独りじゃないって思えた。僕を大切にしてくれる人がいるんだって……わかった。だからさ……菜奈も、そのカフェに行ってみない……? 菜奈にもさ……もっと強く独りじゃないって思ってた欲しいんだ」

「……風……」

彼女は少し戸惑ったような表情を見せる。

僕は思いのままに続けた。

「僕はそのカフェが大好きだよ。そしてきつと、菜奈もそのカフェを好きになれる……から」

元気で明るくてお姉さんのような明日香さんと、クールで頼りになるお兄さんのような亮さんと、ちょっと変だけどいざという時は良き理解者になってくれる冬夜さんと、笑顔が素敵で温かい心の持ち主である彩乃さんと。カフェ『さざなみ』の皆と関わって僕は本当に『さざなみ』が大好きになった。

僕は彼女の目を見つめる。

彼女は俯いてしまったがしつかりと答えてくれた。

「……ありがとう。行ってみたい……風の大好きなカフェに」

そんな答えを出した彼女はまた微笑んだ。

「こんにちはー」

「こんにちは、風さん」

「あ、風君。学校お疲れ様ー。ってその子は？」

僕がカフェに入ると彩乃さんと明日香さんが出迎えてくれた。そして、僕の後ろにいた菜奈に明日香さんが気がつく。

「あ、えっと彼女は」

僕が説明しようとした時だった。

冬夜さんが厨房から出て来て来てふざけるように言った。

「もしかして凧君の彼女さん？」

明らかに面白がっている顔だった。

本当はいい人なのにどうしてこんな性格なんだろう……と呆れながらも僕は否定する。

「違います。彼女は僕の友達で……って菜奈？」

「……………」

菜奈は何も言わないまま、僕の制服の袖を掴んでいた。

そしてそのまま僕の後ろに隠れるようにした。少し頬を赤らめていた。

どうしてこんな反応を見せたのか僕は問い詰めたくなくなる。

「へー？ 凧君……。可愛い彼女さんだねー？」

「凧さんと似て可愛いお嬢さんですね」

冬夜さんがそう言った。彩乃さんはきつと純粹にそう思ってくれたのだろうけど、冬夜さんは明らかに状況を楽しんでいる。

きつと違う。きつと彼女は人見知りか激しいんだと淡い希望を抱く。

そしてその希望を確かめるべく、彼女に尋ねた。

「えと……菜奈……人見知りが激しいだけ、だよな？ 彼女じゃないしね」

彼女はこくりと頷いた。良かった。

「なんだそっか。安心した」

明日香さんが言った。どうして明日香さんが安心するんだろう。僕が疑問に思っていると、明日香さんが菜奈の髪や制服がまだ微妙に濡れていたことに気づく。

「てか、菜奈ちゃんなんか凄く水に濡れてない？ ちょ、ちょっとこっちおいで、風引いちゃうよ？ 彩乃、一人で大変かもしれないけどホールの方頑張ってる」

「はい、わかりました」

そう言っただけで明日香さんは二階へ菜奈を連れて行った。僕は厨房で作業をしていた亮さんに話しかけられる。

「……例の苛めに遭ってた子か？ なんか凄く水に濡れてたが」

「は、はい。その、バケツの水被せられてたので」

「……そうか。でもよく助けたな、偉い」

亮さんは僕の頭にぼん、と手を置いた。なんだか少し誇らしかった。

「にしてもさー、尻君も隅に置けないねえ。あんな可愛い子に気に入られてるようで」

「べ、別にそんなことはありません……僕着替えてきます」

冬夜さんの言葉を聞いて、僕は彼女から頬にキスされたことを思い出す。

僕は頬が熱くなったのを隠すように更衣室へ入った。

いつものように着替えた所で重大なことに気がつく。

この姿を……菜奈に見せるのか、と。

流石にそれは不味いと思った矢先、明日香さんの僕を呼ぶ声が聞こえた。

「凧君ー、そろそろ着替えたー？ 仕事入る前に何か暖かい飲み物持ってきて欲しいんだけどー」

待たせるわけにもいかない。

ここは意を決するしかない、と判断した。

僕は更衣室から出て厨房へ向かう。冬夜がホットココアを二人分作っていた。

「はい、持って行くんでしょ？ その格好でさっ」

「面白がらないでください！ てか、冬夜さんが持って行ってくれればいいのに……」

「ははっ、ごめんねー。僕はちょっと忙しくてさー。だから頑張っ  
て」

「うー……わかりましたよ」

僕は冬夜さんが作ってくれた二人分のホットココアを持って渋々二階へ向かった。

部屋の手前で、明日香さんを呼ぶ。

「あー、明日香さん。格好的に部屋の中に入りたくないんですけど……」

「あははっ、そんなことだろうと思った。でもねー、人生そう甘くないわよ？ 入ってらっしゃい、さあ早く！」

明日香さん絶対楽しんでる。意外とこの人も冬夜さんに似た所があると思った。

僕はこの上なく気が重くなりながら、部屋の中へ入った。

菜奈の体を冷やさないようにするために暖房器具を使用していた部屋は少し暑かった。

「ホットココアです……」

僕はテーブルの上にホットココアの入ったティーカップを置く。極力、菜奈とは目を合わせないようにした。

「ありがと。ふふ、菜奈ちゃん。ウェイトレスの凧君はどう？」

「……可愛い」

「菜奈?!」

予想外の菜奈の言葉に僕は驚く。声が少し裏返った。

「……凧、女の子みたい」

「っ……それを言っちゃ駄目……」

僕は顔を逸らし、部屋から出た。  
同学年である菜奈にまで可愛いと言われるとは思ってもみなかった。

その日、営業時間終了まで彼女は『さざなみ』にいた。明日香さんとは少し打ち解けたみたいで安心した。

僕が着替えて店を出ると、菜奈が店先にいた。直前まで明日香さんとは何か話していたようだった。

「じゃあね、二人とも」

僕と入れ違いに店に入ろうとした明日香さんが言った。

僕は小さくお辞儀をする。菜奈も小さくお辞儀をした。

明日香さんが店の中へ消えて行き、僕は菜奈を見る。

営業時間中、ずっと気になっていたことを尋ねた。

「菜奈、このカフェの人達……どうだった？」

「……みんな楽しそうだった」

その言葉を聞いて、僕は安堵の息を吐く。

菜奈は続けて言った。

「明日香さんって人……スキシップが少し凄かったけど……いい人だった」

「スキシップされちゃったんだ……まあ、されたってことは気に入られたってことだと思うよ」



「……そっか」

菜奈は言った。少し安心したような声に聞こえた。  
僕は彼女の表情を見て微笑み、言った。

「一緒に帰る……？」

彼女はこくりと頷いた。

僕はだんだん彼女の頷きに愛らしさを覚え始めていた。

次の日。僕は自宅の玄関を出る。

そして気づく。自宅前に菜奈がいた。少し眠そうだった。あくびをする息が白くなっている。

僕は鍵を掛け、彼女の方へ歩いて行った。

「おはよう。もしかして待っていてくれたの？」

彼女はこくりと頷く。

それを見て僕は自然に微笑んでいた。

この時、僕はカフエ『さざなみ』のスタッフ以外にも友人と呼べる存在が出来た気がした。

僕と彼女は肩を並べて登校する。

「……初めて友達が出来て……嬉しい」

少し寒い朝だったけれど、僕の心は登校中に菜奈が放ったこの一

言で温かくなった。

学校へ着くと少し変な目で見られていた気がしたが、僕は気にしていなかった。きっと菜奈も。

今は学校で初めて友達と呼べる存在が出来たことが嬉しかった。

昼食を食べる時にも菜奈が来てくれた。

校内にある食堂のテーブルで二人並んでお弁当を食べる。

途中、彼女が尋ねてきた。

「凧……自分で作ってる……？」

「え、うん。あんまり上手には出来ないけどさ」

「……そんなこと……ない。上手」

「……ありがと。菜奈も自分で作ってるの？」

僕が尋ね返すと菜奈はこくりと頷いた。

「親、早朝には仕事に行ってるから……夜は遅いし。だからよく自分で作る」

「そうなんだ……でも、菜奈のお弁当凄く上手だね」

「……」

菜奈がそっぽを向いてしまった。

何かいけないこと言ってしまったのかと焦る。

「えと、菜奈？　なんか悪いこと言っちゃった？」

「……恥ずかしい。褒められるの……」

「え……」

初めて彼女を見た時は、こんなことを言うとは思わなかった。無口でクールな子かと思っていたけど、人見知りだったり褒められて恥ずかしがったり。結構シャイで照れ屋なのかもしれない。彼女の意外な一面を知れた気がして僕は少し嬉しくなった。

「凧は……一人暮らし？ 朝、凧以外誰もいなかった」

唐突に菜奈が尋ねてきた。

僕は彼女に冬夜さんのような観察力の高さを感じながらも答える。

「うん、海外出張中なんだ。だから一人暮らし」

「そっか……」

登校中は無口だったけれど、今は質問してくれることが多い。少しずつ距離が縮まってるのかな。これもちよっと嬉しい。やがて、昼休みが終わり午後の授業になり、午後の授業も終えて放課後になる。

帰り支度の途中、気がつくやうに教室には菜奈がいなかった。一人で帰ったのかな、と思いつつ僕は『さざなみ』へ向かう。

いつもなら「営業中」の札が、今日は「準備中」になっていた。そのことを不思議に思いつつ、僕はカフェの入り口のドアを開ける。

「こんにちは……」

「あ、凧君。ちょっと厨房に来て」

厨房から明日香さんが手招きする。  
言われたとおり厨房に行くと、亮さんと冬夜さんと彩乃さんもいた。

「皆さん集まって……どうしたんですか？」

「明日香さんが重大発表があるんだとか……」

「なんか楽しいことになりそうだね」

「……明日香さん。全員揃った」

亮さんがそう言うと、明日香さんは厨房から休憩室や更衣室がある通路への出入り口の前に立つ。  
少し笑っていた。

「今日から新しい仲間が増えます！」

明日香さんが言った。

僕はどんな人だろう、と少し期待する。

「あら、なんだか楽しみですね」

「……ああ」

「どんな子かなー」

他の皆も楽しみなようだ。

明日香さんは皆の様子を見た後、通路へ向けて声をかけた。

「じゃ、こつち来てー」

明日香さんの呼びかけの後、通路を歩く足音が聞こえる。

そして、制服姿の新しい従業員が厨房に入ってきた。女性用の制服。長くて綺麗で少し青がかった白銀の独特な髪。そして落ち着いた表情。

そこには、僕にとって初めての学校の友達がいた。

「菜奈！」

僕は思わず叫ぶ。

明日香さんが菜奈の肩に手を置いて言った。

「新しくこのカフェで働く仲間。霧瀬菜奈ちゃんね。凧君が昨日ここに連れてきた時に私が誘ったの。担当はホールね。じゃ、菜奈。自己紹介して？」

「……霧瀬菜奈……皆さんが凄く楽しそうに仕事してて……私もここにいたいと思いました。ここなら、独りじゃなくなれるかなって……」

相変わらず静かで儂げな声だった。でも、その声の中にはしっかりと菜奈の本心が込められていた。僕はなんだか凄く嬉しくなった。

「……凧の友達か。よろしく」

「よろしくお願いいたします。菜奈さん」

「よろしくね、凧君の可愛い彼女さ……痛ててて」

冬夜さんが亮さんに腕をひねり上げられている隣で、僕は菜奈を見ている。

そして近づいて笑顔で言った。

「菜奈！ よろしくね！」

「……うん。よろしくね、凧……」

僕は思わず菜奈の手を握ってしまったが、彼女は特に嫌がる素振りも見せずこくりと頷いて言った。

菜奈は無垢で静かな微笑みを見せてくれた。

「菜奈。ここでは皆があなたの仲間であり友達だからね。凧君以外にもちゃんと友達がいるってこと、きつとだんだん分かるよ」

明日香さんが両腕で僕と菜奈の肩を抱いて言った。

菜奈はこくりと頷いた。

明日香さんは彼女を見て爽やかに微笑んだ。そして、僕と彼女の耳元で囁く。

「いちやいちやするのいいけど、ほ・ど・ほ・ど・に、ねっ」

「ななななっ、変なこと言わないでください！」

「……っ」

僕が言うと菜奈もこくりと何度も頷いた。やっぱり彼女も流石

に耐え難かったようだ。

明日香さんはそれを見て笑いながら言った。

「こりゃ、また楽しくなりそうな気がするわね」

からかわれることも日常茶飯事だけど、ここに少しでも早く菜奈が馴染めるといいな。

僕は密かにそう思い、願った。

僕の友達は静かな少女（後書き）

自分で書いておいてアレですが、風は明らかにリア充してますよね。



明日香の悩みは新入りの大人しさ(前書き)

風が菜奈のために頑張ろうとする話。  
いや、でもむしろ……うん。

## 明日香の悩みは新入りの大人しさ

「ありがとうございます……」

「ちーがうつ。もっと明るく言わないと駄目って言ってるじゃないの！」

カフェの厨房の更に奥へ進んだ所にある休憩室。

明日香は菜奈に基本中の基本である接客を教えていた。

菜奈の大人しさや声の小ささは接客時にマイナスとなり、明日香はそれに手を焼いていたようだった。

先ほどから何度も繰り返し練習しているが、一向に明日香の思う接客の形にはならないようだ。

「……」

「もうー……そんなんじゃないここで働けなくなっちゃうよー？」

少ししゅんとなった菜奈を見て、明日香が困ったように言った。

美少女などの可愛い子が大好きな彼女にとって、菜奈のしょんぼりした顔は愛らしくて仕方なかった。今すぐにでも抱きしめたい衝動に駆られそうになるが、仕事中にスキンシップをすると亮に注意されるため彼女は迂闊に行動出来なかった。

「……」

「どうすればいいかな……」

煩惱を振り払った明日香は頭を指で掻いて呟く。

相変わらず菜奈はしょんぼりしたままだった。

「とりあえず、このことはまた後でにしようか……次は清掃の仕方やレジ打ちなんかを教えるからね」

明日香は菜奈に出来るだけ分かりやすく説明した。

そして、実際にやらせてみる。すると、たった一度教えただけでも関わらず菜奈はやすやすとやってのける。

接客以外のことは完璧に出来ていた。この現実が、接客が全く出来ないことを更に重要な問題に仕立て上げる。

「接客さえ出来ればなあ……」

明日香は休憩室で一人悩んでいた。

接客さえ出来れば彼女は頼もしい従業員になる。しかし、今のままではきつと出来そうにないと明日香は確信していた。

「元々大人しい子だし、こればかりはどうしようも……でもやっぱなあ」

一人で悩み続ける明日香の独り言は厨房まで聞こえていた。

仕込み作業中の冬夜が調理中の亮に言う。

「明日香さん、相当悩んでるね。菜奈ちゃんのことでも」

「……まあ、ホールを担当させるにしても今のままじゃ無理そうだしな」

「あの子、凧君が相手なら結構喋れるよね。僕ら相手には全然喋らないのに」

「……恩人とただの他人の差じゃないのか？」

「でもさー、やっぱり同じ職場で働くならもうちょい心開いて欲しいっていうか……」

「……凧にはだいぶ心を開いているし、明日香さんにも少しは開いているが」

「だから、僕や亮や彩乃ちゃんにも凧君と同じように」

「……そりゃ、まず無理だな」

「どっしてさ？」

「……俺はあの子の支えになれるようなこと、何もしてねえし何すればいいかまだ分かってないだろ。まだ仲間と思われてないって言い方も出来る」

「そっかー……」

「……」

二人の会話をレジのスペースで聞いていた菜奈は何も言わなかった。

隣でサポートをしていた凧は心配そうに菜奈を見つめる。

その日は結局、問題を解決できないまま営業時間終了を迎えた。

「ねえ、菜奈」

「……？」

営業時間が終了した後、凧と菜奈は待ち合わせて一緒に帰り始める。家への帰り道を二人で肩を並べて歩いていた。海の波音が夜道に微かに響いていた。

凧は隣を歩いている菜奈に心配するような口調で尋ねる。

「やっぱり、接客するの難しそう？」

「……うん」

こくりと頷く菜奈。

凧はそっか……とため息混じりに言った。

しばらく沈黙が続いた後、菜奈が口を開いた。

「……このままじゃ働けなくなるかも……しれないって」

彼女は立ち止まり、俯いて凧に言った。感情を表に出すことが少ない彼女にしては珍しく、不安と動揺が入り混じる表情をしていた。彼女にとつての凧はいつしか、弱味を見せることの出来る唯一の存在になっていた。

凧は立ち止まって少し沈黙する。そして、なんとか彼女を安心させようとした。

「……大丈夫だよ。菜奈。菜奈は他の仕事が完璧に出来るし。接客が難しくても僕がカバーするよ……だから、心配しちゃう駄目だよ」

凧は菜奈の頭を優しく撫でる。

菜奈はその言葉を受け、不安げな顔のままこくりと頷いた。  
その後、凧の自宅前まで二人で歩いた。

「また明日ね、菜奈。おやすみなさい」

「うん……また明日。おやすみ……凧」

凧は心配だった。

さつきはああ言ったものの、やっぱり接客が出来ないのは大きな問題だ。

なんとか出来ないか考えるが、その日は全くいい考えが浮かばなかった。

次の日。

いつものように凧と菜奈は一緒に登校し、一緒に学校で過ごし、放課後は一緒にカフェへ向かった。

凧の目には菜奈の表情がどこか暗いように見えていた。

仕事中、厨房で冬夜に相談する。  
ふざけることが多い冬夜だが、人の心をよく理解出来る人間でもあるので相談する時は頼りになる。

「どうしたらいいんだろうねえ……今日、彼女だいたいテンションが低いようだし」

「そうですね……」

表情豊かではない彼女の心情さえ理解している冬夜に、凧は少し尊敬に似た驚きを感じる。

その時、休憩室の奥から明日香の声が聞こえてくる。

「だーかーらー！ 声が小さいし表情が暗いつてばー！」

「……ごめんなさい」

休憩室を凧と冬夜が覗く。

明日香が若干怒っていた。菜奈は暗い表情と小さな声で謝る。

「菜奈……やっぱり接客は大事だよー？」

「……」

「このままじゃ、ここでは働けないわよ？ 冗談抜きでさ」

「……それは……嫌」

菜奈の震える声。

凧はただ心配することしか出来なかった。

そして、いつの間にか冬夜がいなくなっていることに気がつく。

「亮ー。どうして邪魔するのさー」

「……うるせえ。お前は早く仕込み作業の続きをしろ」

亮が冬夜を厨房に連れ戻ったようだった。

凧は自分も仕事に戻る。  
そして次はレジで仕事をしていた彩乃に相談してみた。

「彩乃さん。どうしたら菜奈の接客が上達すると思いますか？」

「うーん……そうですね……私は皆でするこの仕事を楽しいと感じ時、自然と笑顔で接客出来たのですけれど」

彩乃が困ったように言った。その後彼女は客に呼ばれてその場を離れていった。

凧は一人で悩みながらも仕事を続ける。

「何度言ったら出来るようになるの！ 違っつてば！」

聞こえてくる明日香の声がとつもなく恐れを感じさせる。

このままでは本当に菜奈が辞めてしまうかもしれない。凧はそのことが一番の心配だった。

「どっしりよっ……」

悩んでいる凧に、亮は後ろから声を掛けた。

「……凧。あの子はまだこの職場に慣れていないようだぜ……？  
どうにかして慣れさせてやればいいんじゃないかねえか？」

「慣れさせる……ですか……」

亮の言った言葉が果たしてヒントになるのかどうかはわからない。しかし、この際どんなことでもするしかないと思っていた。  
菜奈がこの場所に安らぎを感じることが出来るようになるならば。



どんなことでも。

「明日香さん、彼女どうでした？」

営業時間終了後。先に帰った凧と菜奈を覗いたスタッフが厨房に集まっていた。

冬夜の問いかけに明日香は首を横に振る。

「全然駄目ね……」

「凧さんも随分とお悩みになっているようでしたが……」

彩乃が言った。

明日香は悩み事を吐き出すように言った。

「あの子元々無口だからさ……どうしても接客には向いてないって  
いうか……接客が出来ないようじゃこの仕事はきつと無理だろうし  
……明日、どうしても駄目なようならば辞めてもらおうしかないって  
言ったからなあ」

「ええ、そんなこと言っちゃったんですか……」

冬夜が呆れたような声で言う。

そして亮が小さな声で言った。その発言は、明日香の心を大きく揺さぶる発言だった。

「……菜奈が辞めたら、凧も辞めかねないですよ。多分。」

「ええええ?! なんで?!」

「……今の凧は同じ境遇にいた菜奈のことを、きっと誰よりも大事に思ってます。そして、ここに菜奈を連れてきたのも凧だ。もしも菜奈が辞めるとなれば、凧は彼女に辛い思いをさせた責任を感じるんじゃないんですかね」

「そんなああああ!! 菜奈が辞めちゃうことも本当は嫌なのがいいい! 凧君まで辞めちゃったら……ああああ! あんなこと言わなきゃ良かったああああ!」

亮の言葉を聞いて明日香がパニック状態に陥る。

菜奈に対して言った、事の重要さをよく考えていない発言をこの上なく後悔していた。

亮と冬夜は先に帰っていった二人のことを思い出しながら言う。

「……今、菜奈のこと一番考えているのも心配しているのも凧だ。こうなった以上、凧が今までの菜奈を変えることを信じるしかないようにも思えてくるな」

「確かに。彼女の良き理解者だもんね、凧君」

泣きそうになっている明日香が神に祈る思いで言った。

「凧君……なんとかしてえええ……」

「明日香さん……今は凧さんを信じるしかありません……」

泣いている明日香を心配そうに慰める彩乃。彩乃も、凧と菜奈がここを辞めてしまうという可能性を心のどこかで感じているのか、普段は見せることのない悲しそうな顔だった。

なんとかその場を鎮静させようと、亮は言った。

「……俺達にも何か出来ることはないか考えるぞ」

彼はそう言いながらも凧がどうにかすることを望んでいる。自分が今言ったことはあくまで保険に過ぎない。

「……凧、頼む」

心の中で密かに、凧の菜奈を想う気持ちを信じていた。

「……」

いつものように菜奈と凧は肩を並べて暗い帰り道を歩いていた。途中、菜奈は足を止める。

「菜奈……」

「凧……やっぱり……無理……みたい」

菜奈の声が震えていた。表情は今にも泣き出してしまいそうだった。

凧は内心動揺しながらも宥める。

「そ、そんなことないよ……」

菜奈は首を横に振って続けた。

「……明日駄目ならもう辞めてもらうしかないって……」

「あ、明日。まだ明日があるんでしょ……?」

「今のままじゃ……出来そうにない……」

菜奈は俯いた。触れれば崩れ去ってしまいそうなそのか細い声に、  
凧は不安を覚える。

「菜奈……」

「……っ……っ。辞めたく……ない……」

菜奈の頬を涙が伝う。その量は徐々に増えていく。  
凧は彼女の力になれない自分の無力さを悔やむ。

「……ごめんね……菜奈……」

菜奈は悔やむ表情をしている凧の肩に額を当てる。  
そして、泣きながら本当の気持ちを告白した。

「凧と……もっと一緒にあの場所にいたい……皆と……もっと仲良  
くなりたいっ……辞めたく……ないっ」

「菜奈……僕だって菜奈ともっとあの場所にいたい！ 菜奈にあの

場所で心から独りじゃないことを確信して欲しい！ 菜奈と、皆とあの場所で日常を送りたい！」

凧も彼女へ本当の気持ち告白した。

この時の彼は、大事な友達である彼女の力になれるのならばどんなこともする覚悟でいた。

そして亮や彩乃の言った言葉を思い出す。

彼女に早くあの職場に慣れてもらえるように。皆でする仕事を楽しいと感じてもらえるように。そして、明るく笑ってもらえるように。最後まで諦めてはいけない。凧はそう思っていた。

「凧……っ」

「菜奈…… 僕が絶対になんとかする…… だから、泣かないで……」

凧は菜奈の頭をそっと撫でる。

少しずつ時間をかけてだったが、彼女のすすり泣く声は止んでいった。

その後二人は再び歩き、凧の自宅の前で別れる。

「……また明日ね。 菜奈」

「……」

菜奈はこくりと頷く。

凧は菜奈から離れ自宅の玄関前へ向かう。後ろを振り向かないまま、菜奈に言った。

「絶対…… なんとかするからね」

そう言い残した凧が玄関から自宅へ入ろうとした時、菜奈は声を振り絞って言った。

「私も……諦めないっ……凧ともっと一緒にいたいから……頑張るっ」

「!!……うん」

ボタン、と夜道に音を響かせ玄関のドアが閉じる。

自宅へ入る直前、凧は菜奈の言葉に少し微笑んでいた。

次の日の夕方。学校帰りの凧と菜奈は『さざなみ』に到着する。厨房へ向かうと、なんだか雰囲気が違うことに凧は気がつく。

「お疲れ、凧君！ 菜奈！」

「明日香……さん？」

明日香は凧と菜奈を二人まとめて抱きしめた。

昨日までの、まるで錆びた歯車のような不穏な雰囲気が無くなっていた。初めてこの場所に来た時のように。

「昨日はゴメンね。菜奈。やっぱり、あなたはあなただから……たとえ接客業が難しくてもなんとか皆でカバーしようって話し合ったんだ」

明日香が菜奈の頭を撫でて言った。

菜奈は驚きと動揺が混じった不思議な表情になる。

凧も明日香の言葉と態度に気が抜けてしまう。しかし、この問題が解決に向かったような気がして少し嬉しかった。

「さ、二人とも着替えてきて」

「は、はい」

「……」

明日香が二人に対して制服に着替えるように促す。

菜奈はこくりと慌てて頷く。

そして、更衣室に向かった。更衣室の前で、凧が言う。

「先に着替えてきて。僕は待ってるよ」

一つしかない更衣室を男女が二人きりで使うのは都合が悪いので、

凧は菜奈に先に着替えてくるように促す。

いつもならそれに従う菜奈だったが、今日は違った。

「別に一緒でも大丈夫……それに、話したいことある……」

「え、え?! でもさ!」

「いいから……」

菜奈は凧の腕を引いて更衣室に入った。

凧は着替える途中、絶対に菜奈を見ないようにして着替えた。

なんとか着替え終わると、菜奈は口を開いた。

「……明日香さん。気を遣ってくれたのかな……私が駄目だから、気を遣わせちゃったのかな……」

少し悲しげな声だった。

凧は明日香の優しさがかえって彼女を傷つけてしまっているような気がした。

それでも、なんとか励まそうとする。

「そ、そんなことないよきつとつ。菜奈は駄目なんかじゃないし……」

「……」

「とにかく、早く仕事しよっ」

制服を着てウエイトレスになった二人は更衣室を出た。すると、明日香が近寄ってくる。

「やっぱり可愛いわね二人とも!! もう我慢しない!! きゅっつ  
っつっつ」

「わっ、明日香さん! 苦しい……です!」

「……苦しい……」

明日香が激しく悶えながら二人を抱きしめる。

この時、いつもなら止めに入る亮が何も言わずそれを見ていたことが凧は驚きだった。



「亮さんが止めないなんて……てか苦しいですってば……」

「……この職場のあるべき姿を菜奈に見せようと思ってな。だけどやりすぎだ」

亮はそう言つと明日香の後頭部を軽く叩く。

「痛っ！ 何よ亮！ 今日が多めに見てくれるんじゃないの？  
！」

「……限度がある。二人も苦しそうだったしな」

「でもさー、ホントは亮も明日香さんのように二人を抱きしめ……  
痛てててててて」

冬夜の足を亮が踏みつけ、ぐりぐりと踵を動かす。

凧は、この光景に最近まで忘れていたような感覚を思い出す。

明日香の過度なスキンシップを亮が抑制し、そんな彼への減らず  
口を叩く冬夜が返り討ちに遭う。その情景を彩乃が眺めて笑う。

「というわけでさ。やっぱ菜奈には辞めて欲しくないの！ だって、  
もう私の妹も同然だもん！」

「……その理由はおかしい気がするが」

そんなありのままの姿を見せてくれた年上の一同に、凧は笑顔を見せた。

そして、自分が楽しい場所だと感じていた場所の本当の姿だと感じていた。

「ふふっ。これが本当の『さざなみ』ですもんねっ。その……えと、明日香お姉ちゃん……のスキンシップが無ければ明るくなりませんし」

この場を盛り上げようとして、凧も以前してみせた妹のような弟キャラに転じる。

それに明日香が再び激しく悶えた。凧を強く抱擁する。

「あああ！ お姉ちゃんって言うてくれた！！ 凧君ー！！」

「わぶっ……苦しいです、お姉ちゃん！」

「これはお姉ちゃんの愛なんだよおお！」

「……明日香さん。凧を今すぐ離さないと制裁を加えます」

「あれ、亮。妹の凧君が取られると思って嫉妬して……いだだだだ」

菜奈はその光景に目を見開く。皆の活気が溢れるやり取りに驚きながらも少しずつ楽しそうだと感じていた。

そんな彼女に彩乃がそつと言った。

「菜奈さんも、すぐに溶け込めると思いますよ。とても楽しい……皆の輪の中に」

「皆の……輪……」

菜奈は少しずつ頬が緩む。

そして……

「皆……楽しそう……ふふっ」

今までにない、明るい笑顔を見せた。  
その笑顔を、皆はしっかりと見逃さなかった。

「あああ！ 菜奈！ 今のその感じ！！ それでいらっしやいませ  
って言うてみて！」

「え……い、いらっしやいませっ」

「うん！ 声はまだ少し小さいけど、明るくていい感じだよ！ そ  
の調子で頑張って！」

明日香が嬉しそうに言った。  
彼女の腕の中の凧も微笑む。

「菜奈……良かったね！」

「……うん」

菜奈はこくりと頷き、また笑顔を見せる。

その後、皆で笑い合った時に聞こえてきた客の呼び声により、  
— 同は仕事に戻っていった。

新たな仲間である、菜奈も含めて。

明日香の悩みは新入りの大人しさ（後書き）

菜奈視点の話が書きたくて書きたくて震えております。

なんか、もう。うん。どうしてこんなにいちやいちや出来るのかし

r

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8744z/>

---

僕の日常は小さなカフェにて

2012年1月6日11時47分発行